

# モンゴル草原の突厥オラーン・ヘレム壁画墓 Turkish Ulaan Kherm Mural tomb of Mongolian plateau

東 潮

## I オラーン・ヘレム墓の発掘

2011年、モンゴル草原のボルガン県バヤンノールのオラーン・ヘレムで、モンゴルとカザフスタンの共同調査として突厥壁画墓が発掘された(図1)。ウランバートルの西約180kmの地点である。2001年来、A. オチル、L. エルデネボルド、A. エンフトル、N. ガンバトラによってオルホン・トーラ河流域のフィールド調査がなされ、その過程で墳墓が発見されたという。

A. オチル〔2011〕は韓国東北亜歴史財団で「モンゴルで発見された古代遊牧民壁画墓に関して」と題して発表した。2012年3月にモンゴル国立美術館で「古代遊牧民の美術展」が開催された。

朴雅林〔2012〕は2012年7月に壁画墓を現地調査し、展示図録などをもとに考察した。その論文でモンゴル・トゥブ県ザーマルの僕固乙突墓(635~678)についてふれている。

2013年にA. Очир・Д.Эрдэнэболд 2013 ”ЭРТНИЙ НҮҮДЭЛЧДИЙН БУНХАНТ БУЛШНЫ МАЛТЛАГА СУДАЛГАА”の報告書が発刊された。

2013年8月に遼代のチンドルゴイ城、オラーン・ヘレム城とともにオラーン・ヘレム墓を踏

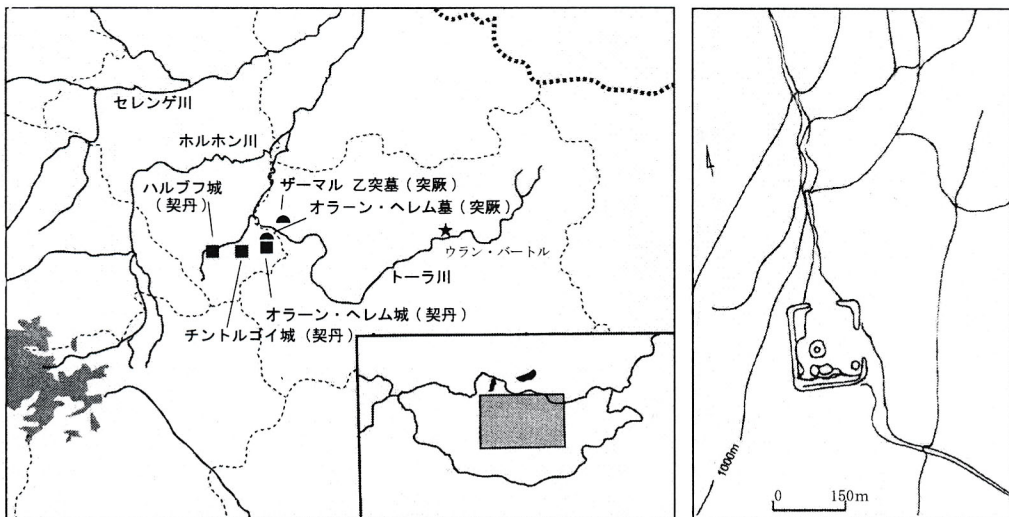


図1 オラーン・ヘレム墓の位置と墓域 (白杵・千田・前川2006, A. オチル2013)

査した。『古代遊牧民墳墓の発掘調査—ボルガン県バヤンオール村オラーン・ヘレム円形墳発掘報告』をもとにオラーン・ヘレム墓の壁画図像を東アジア諸国の壁画図像と比較し、その系統関係をさぐる。さらに墓制のあり方からその歴史環境を考察する。

## II オラーン・ヘレム墓の概要

**封土・垣牆・墓室** 南北約 34m、東西約 30m、高さ約 4.0mの楕円形である。墓の構造は斜坡墓道、4 過洞、4 天井、2 耳室（墓道からかぞえて第 4 天井）、甬道、墓室からなる単室土洞墓である。全長約 46m。墓道は約 20m、地表面から 6.3m、約 15 度の傾斜である。過洞・天井部の長さ約 19m、幅 1.6～2.2m。墓室は長さ 3.1、幅 3.4、甬道長さ 3.0、幅 1.6m である。第 4 天井に両耳室がつくられる(図 2)。

現存する墳丘端は墓道の後(北)壁部にあたる。楼門図像が表現された、門楼部から墳丘が形成されたのであろう。墓室の中心は墳丘の中心とすれば、墳丘の北辺は流失されたことになる。墳丘を中心に長さ 175m、幅 83mの長方形の陵園の垣牆で区画されている。

**壁画** 墓道・過洞・墓室にえがかれる(図 3・4、図版 1～11)。墓道の東西壁に青龍と白虎、列戟と儀衛 1 人、男侍 3 人がえがかれる。後方の人物は内侍で、宦官であろう、韋洞墓などの人物像に似ている〔陝西省文管委 1959〕。その人物表現は都の長安の壁画図像と遜色はない。墓道北壁上部の門楼は過洞入口と一体的に表現され、木造建築をおもわせる。門の基台に入母屋式の楼閣で鴟尾に鳥が止まる。斗栱、扉、櫺子窓、欄干が写実的に描かれている、屋根の上方に雁の群れがみえる。門楼はさらに墓室・甬道の門にもある。この墓室の門楼に帰雁図像は表現されていない。外界につながる墓道の図像と意識的に区別されているようである。

**天井・過洞** 第 1 過洞の両壁に牽馬図がある。東壁の牽馬図の御者は弁髪風の頭髪で、開襟の長袍で、栗帯をしめ、袴を着る。手綱を持つ。馬は鞍金具を装着し、方形状の輪鏝(右)が表現されている。副葬品の金銅装の輪鏝に類似する。杏葉などは表現されていないが、明器としての杏葉は出土している。西壁の御者は鳳帽をかぶり、円領の長袍、袴・裳を着る。左手で手綱を持つ。鞍を装備するが、鏝(左)が表現されていない。鞍敷は毛織物である。この御者と馬装のちがいは被葬者夫婦の出自に関係するのであろう。過洞の後壁に蓮華化生図がある。第 4 過洞の両壁に 2 人ずつの人物がある。西壁に女侍と男装女侍の人物がある。墓道の最後尾の人物と風貌が似る。墓道・過洞には門楼→蓮華紋→畏獣(鬼神)→門楼→鎮墓獸というように一連の辟邪、他界にかかわる図像が表現されている。

**墓室** 壁面に屏風状の輪郭(褐色)をとり、樹下人物像をえがく。女侍は赤色の長袖の衫、条紋裙を身につける。隋から初唐様式の細身の女性像である。男侍は円襟の袍、裳をはく。赤で彩色される。いわゆる樹下老人像ではない。樹木は菩提樹のようである。上部で数条の赤色線で雲紋があらわされている。同時期の昭陵陪葬の燕妃墓(671)の屏風画に樹下人物図像、雁とともに山岳流雲紋が描かれている。オラーン・ヘレム墓の朱線の横列紋は雲紋を模したものであり、画師独自の表現方法といえる。

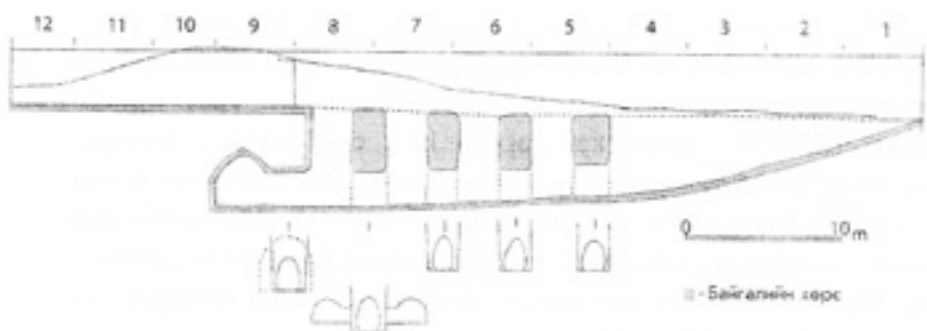
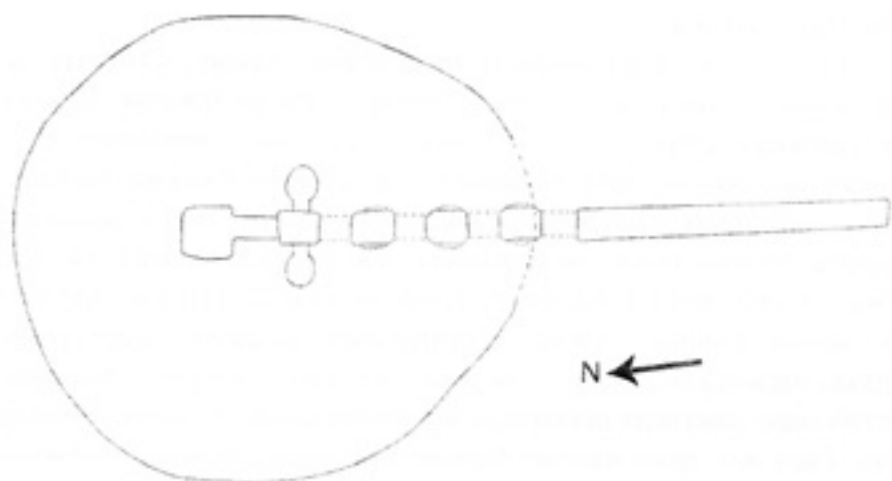
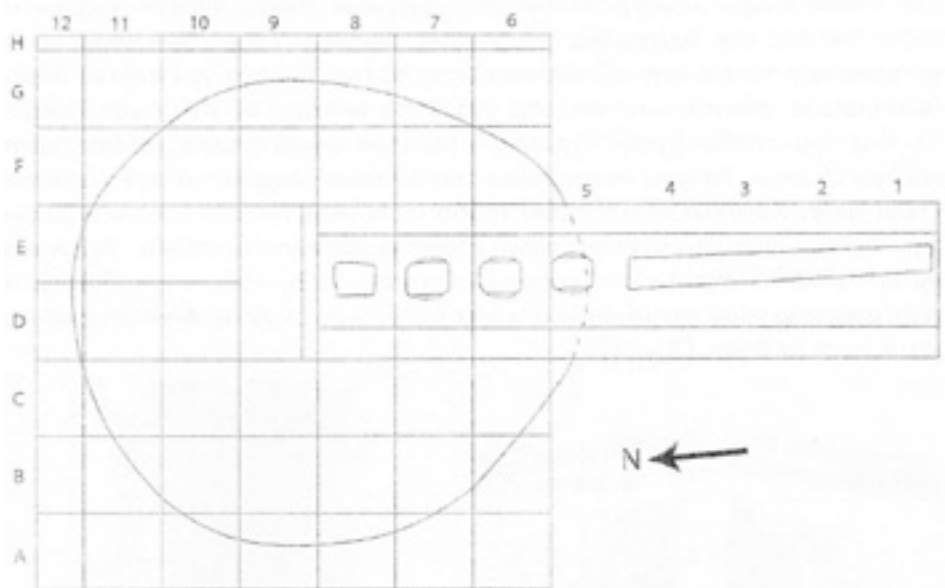
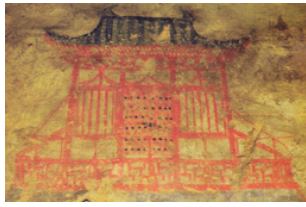


图2 オラーン・ヘレム墓の墳丘と墓室



門楼 墓門・第4過洞北壁



畏獣 第2過洞北壁



蓮華紋 第1過洞北壁



門楼 墓道北壁

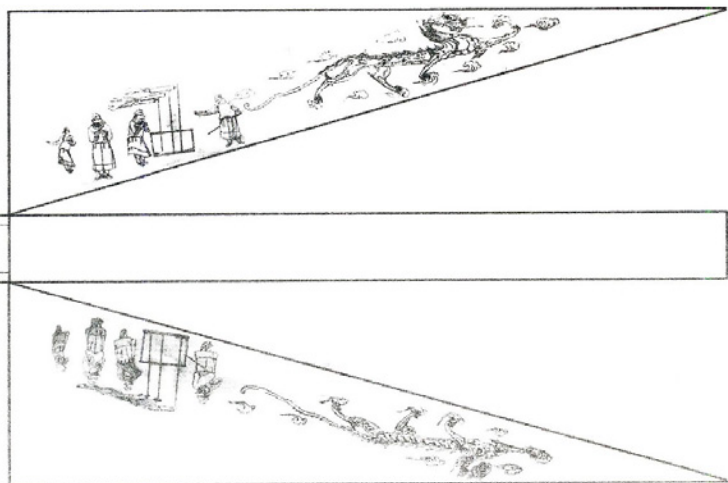
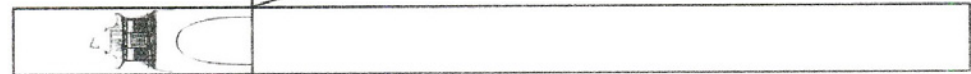
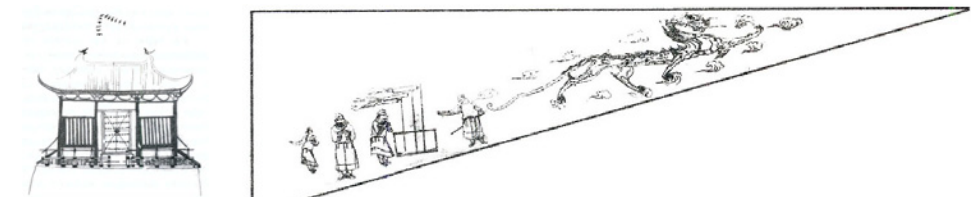
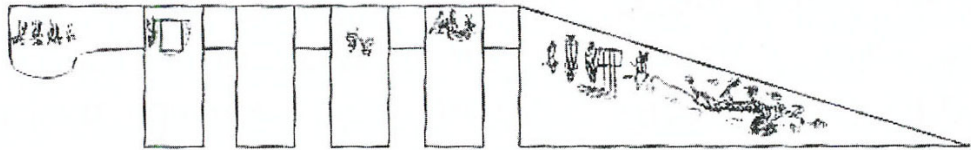
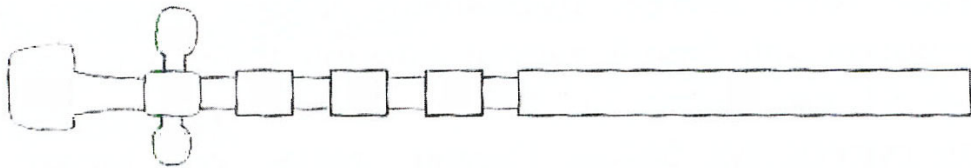
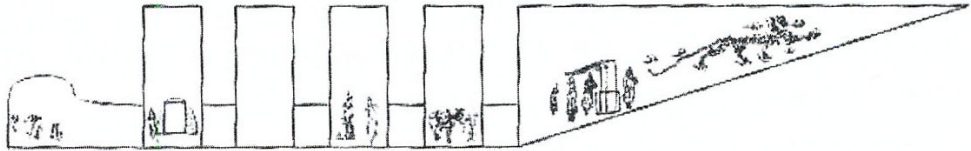


図3 オラーン・ヘレム墓の壁画空間

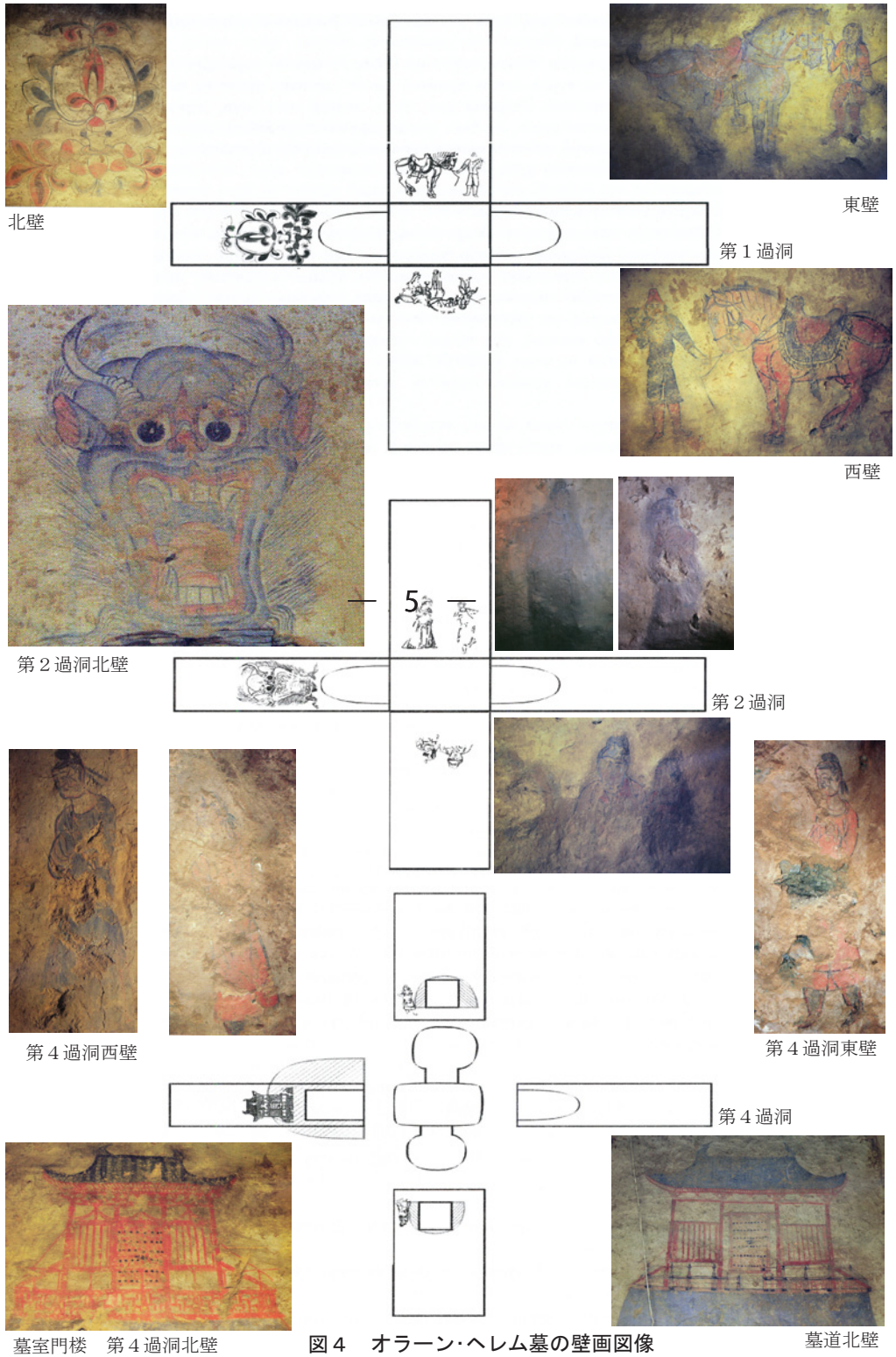


図4 オラン・ヘルム墓の壁画画像

### Ⅲ 北朝・隋・唐の壁画墓

オラーン・ヘレム墓は墓室構造や壁画からみて、三原李寿墓(631)、礼泉長楽公主墓(643)、新城長公主墓(663)、咸陽蘇定方墓(670)、阿史那忠墓(675)など初唐の様式である。オラーン・ヘレム墓と同時期の墓の構造、壁画内容をみてみよう。

**河北省磁県茹茹公主墓(550)**〔磁県文化館 1984〕 磚築墓で斜坡墓道・羨道・玄室からなる。墓道の南端、入口部分の東西両壁に青龍・白虎がえがかれる。龍虎のまわりは蓮華紋・雲気紋で飾られる。儀仗、廊屋状の列戟(戟架)が配列される。南壁には鬼神像一体と羽人一人、鳳凰が表現される。鬼神は甬道門牆上に2体がみえる。羽人は右手に蓮花と蓮蓬を持ち、右肩の上へのせ、左手を曲げ、とがった履をはく。門牆に大鳥(朱雀)を中心に左右に鬼神像(方相氏)、上下に蓮華紋・唐草紋でかざる。墓室四壁の画像は二段構成となっており、上段に四神図像、下段に人物群像がえがかれる。門楼の大鳥は四神としての朱雀である。墓室内の四神の青龍・白虎が墓道に表現空間がかわる、過度期には墓道北壁に朱雀がえがかれるばあいもある。朱雀は門楼に変化する。墓道に北壁に墓主像と天蓋・羽葆・団扇・杯などを持つ侍従からなる。墓主の茹茹公主を表現しているようである(図5)。

**河北省磁県湾漳墓(560)**〔中国社会科学院考古研究所・河北省文物研究所 2003〕 文宣帝高洋武寧陵と推定されている。墓室・甬道・斜坡墓道からなる。墓室頂部に天象図、天の河が表現される。四壁の梁上に方格列がめぐらされる。東壁に虎、羊、畏獣、鹿、青龍、白虎、南壁に馬、牛、鵝鴨、西壁に猿などが配される。北壁は剥落のため不明。これらの神獣は十二支像につながる。甬道門牆に蓮弁坐に立つ朱雀、畏獣、花喰い羽兔、花喰い鳥、忍冬唐草紋でかざられる。門牆の朱雀(鳳凰)は北朝壁画の特色である。墓道入口に青龍、白虎。墓道上辺の天に畏獣や神獣、下辺の地に儀仗行列がみ青龍は二重の首輪があり、身部や羽部に唐草紋、頸部と尾の付け根、尾のなかほどに火炎紋装飾をほどこす。白虎も同じである(図5)。

**陝西省潼關関稅村隋墓**〔陝西省考古研究院 2009〕 斜坡墓道・6天井・7過洞・龕室・甬道・墓室からなる。全長 63.8m、深さ 16.6m。墓道長 21m、幅 2.3m。墓道両壁に出行儀仗図が配置される。左右対称で各壁に人物 46 人、鞍馬 1 匹、列戟 1 架がえがかれる。東西壁の列戟は 9 杆で二又の戟に虎頭紋装飾の幡がつく。東壁の幡の紋様は青龍でない。いずれも虎紋である。墓道後壁(北壁)に門楼がある。墓室頂部に星宿図、四壁壁画は完全に剥落する。被葬者は皇帝一族と推定されている(図7)。

**太原南郊唐墓(金勝村 7 号墓)**〔山西省考古研究所 1988〕 斜坡墓道・墓室からなる単室磚墓。墓室頂部に日象・月象、連続珠紋で飾られ、その下に四神が配置される。玄武・朱雀の両側に唐草宝相華紋が配されている。青龍・白虎の尾は斑点・縞状に表現され、立ちあがる。墓室は南壁に笏・劍を持つ侍衛、東西両壁の南端に扏子やT字形杖を持つ侍女が配置される。北壁の中央に駱駝・馬の牽引図、ほかの壁面には八幅の樹下老人図をえがく。駱駝と馬は他界する墓主の乗物である。時期は四神図像が墓室に表現される段階のもので、7世紀中葉ごろと推定される。樹下老人像は四神とともに道教とあいつうじる図像である。四神図像は同じ太原南郊の

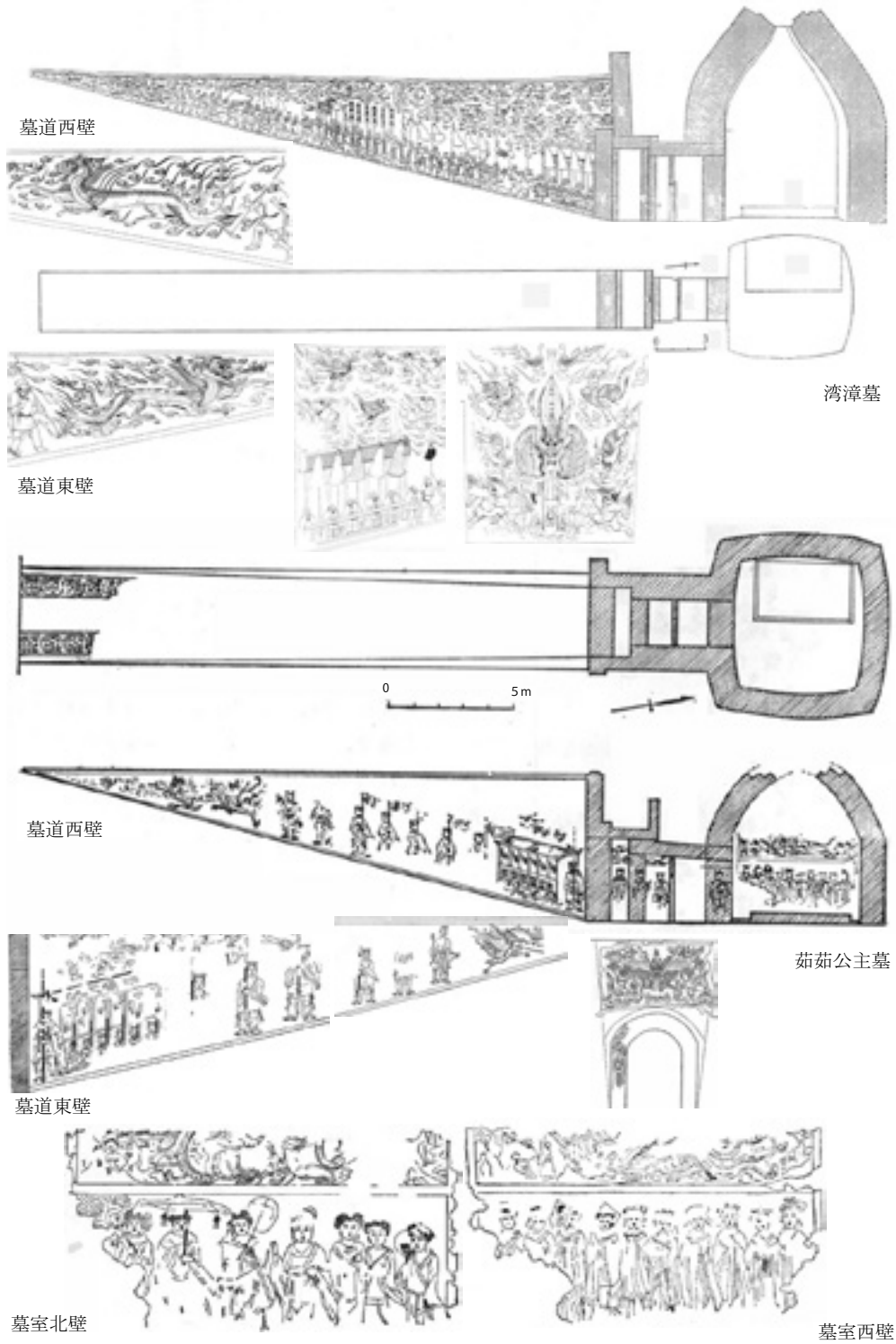
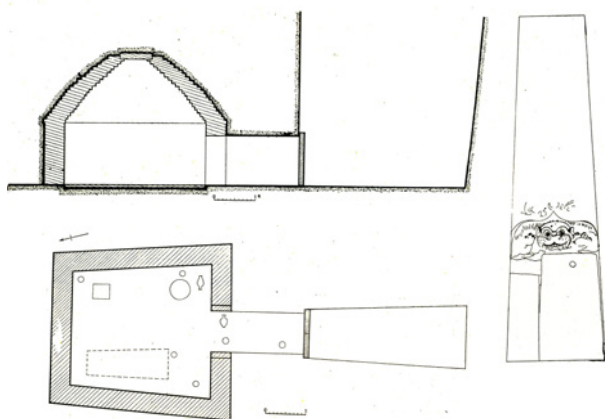
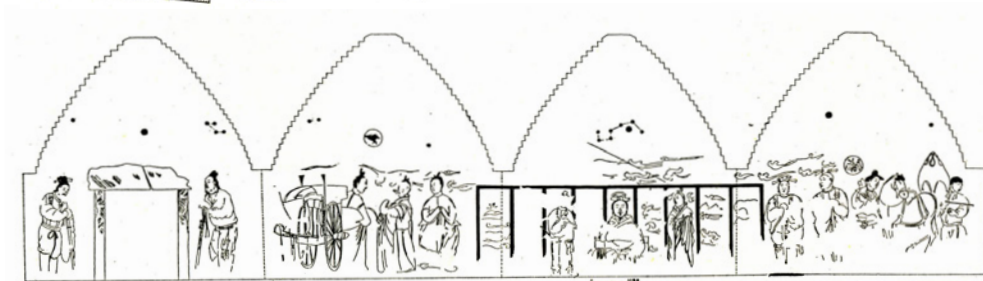


图5 東魏磁县湾漳墓(550)·茹茹公主墓(550) [河北省文物研究所2003·磁县文化馆1984]

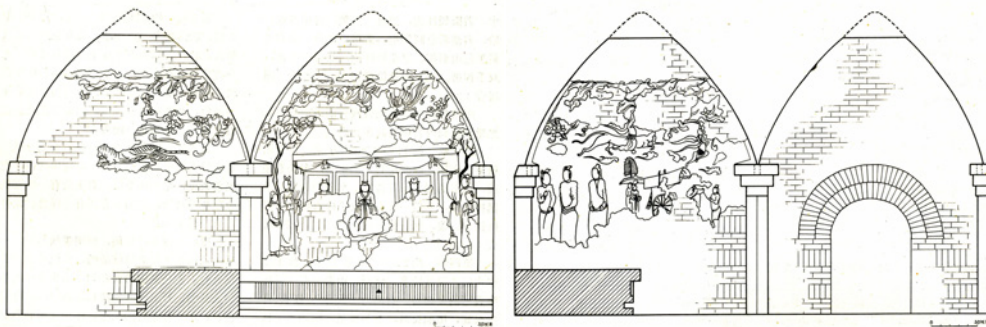
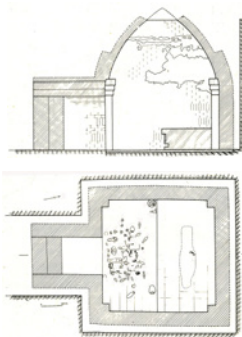


墓室北壁



墓室

道貴墓

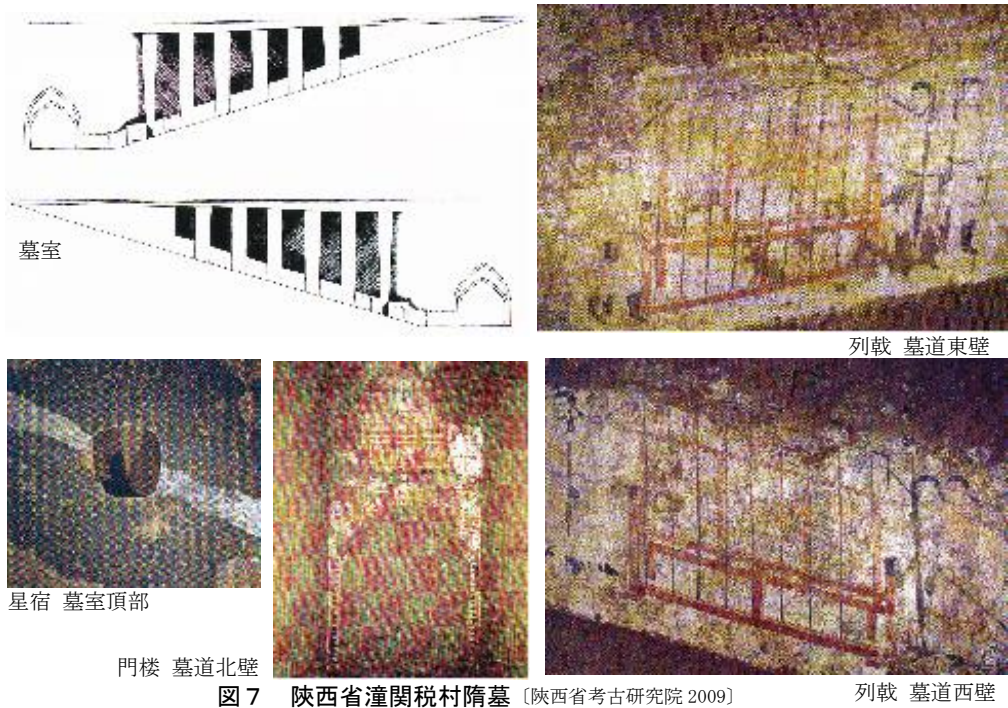


墓室

金勝村北齊墓

图6 太原金勝村北齊墓·濟南馬家庄道貴墓(571) [山西省考古研究所1990·濟南市博物館1985]



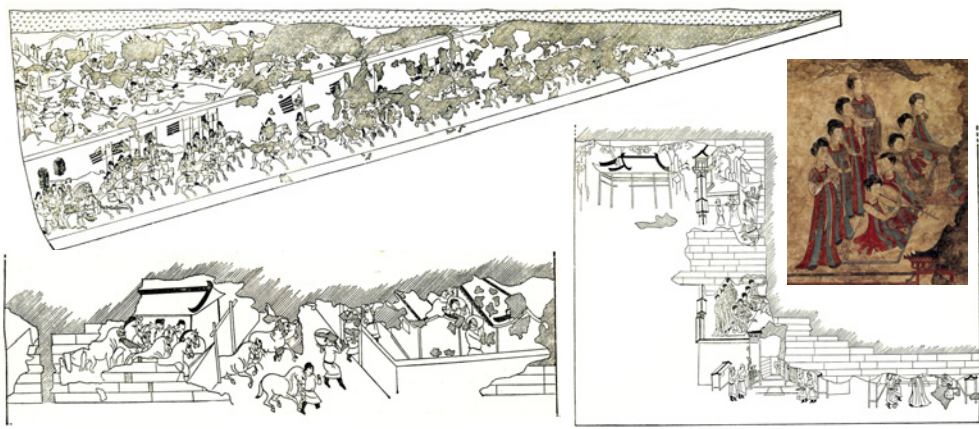
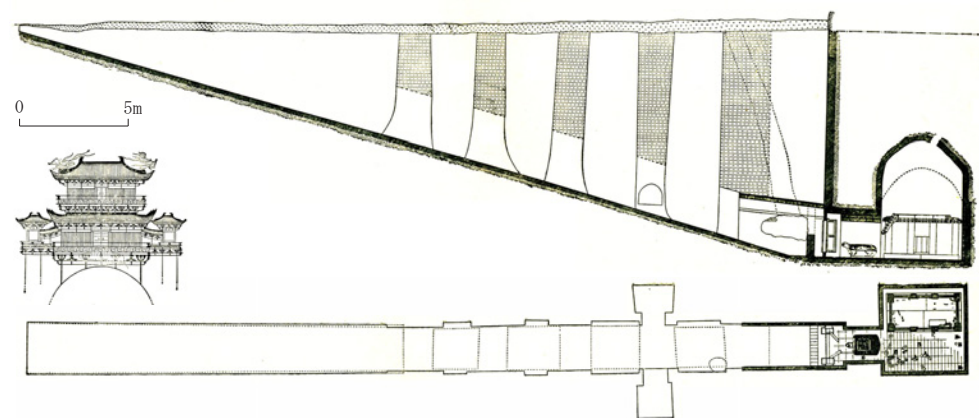


北齊墓の系譜をひく(図6)。

**陝西省三原李壽墓(631)**〔陝西省博物館 1974〕 墓室内の南門に二対の朱雀(鳳凰)、石槨外壁に四神・儀衛、文武侍従、騎龍駕鳳仙人、樂舞・侍女・内侍、男女侍従、十二支像が彫刻されている。斜坡墓道入口の東西壁に飛天の痕跡があるが、青龍・白虎は表現されていない。石槨外壁は中央上方に玄武像、下方に一對の鬼神像と朱雀、その両側に戟・幢を持つ門衛、さらに騎龍駕鳳仙人と笏・劍を持つ男侍が浮き彫りされている。この石槨は墓主の生前の寝殿をあらわす〔孫機 1996〕。第4天井東西壁に各7列戟図がえがかれている〔宿白 1982〕。李壽の官職・官品は「司空(正一品)上柱国(正二品)淮安靖王(正一品)」である〔权奎山 1998〕(図8)。

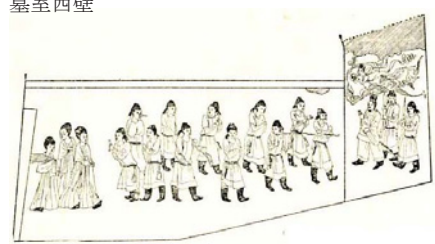
**陝西省礼泉長樂公主墓(643)**〔昭陵博物館 1988〕 墓道・天井・過洞・龕・甬道・墓室からなる単室磚墓。墓道両壁に青龍・白虎がのこる。墓道の西壁は、北から南に5人の旗を持つ騎兵と隊長(領隊)、1人の領隊と7人の衛士、車馬、青龍の順にえがかれる。中央の領隊箭壺、5人の衛士は紅色の旒旗を持つ。青龍・白虎につづいて、両壁に車馬がえがかれる。西壁の車馬の轆端に龍頭が彫刻され、車上に華蓋がある。車輪側に虎頭魚身怪獣がいる。鱗尾をもち、龍身や蛇身ではない。東壁の車馬具にも怪獣が表現されている。車馬具は墓葬祭祀における墓主の乗物としての性格をもつ。墓誌蓋の四斜面に四神、山・樹木を表現する。誌石に四辺に十二辟邪、山樹を彫刻する(図9)。

**陝西省礼泉李思摩墓(647)**〔昭陵博物館 2006〕 墓室樹木の間に人物を配する。左手に団扇、右手に花を持つ侍女、伎楽(女性)がみえる。ほかに立襟の袍をはおり、両手で壺を持つ人物は大柄で円襟の袍の上に狭袖の広袍をはおる。腕は通していない。化粧からみて男装女性で、そ

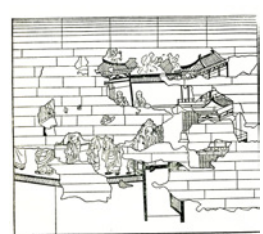


墓室西壁

墓室北壁



前甬道東壁



寺院 後甬道西壁



道觀 後甬道東壁



天井東壁

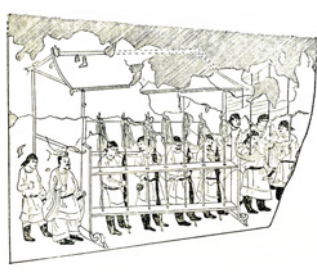


图8 陕西省三原李寿墓 (630) [陕西省博物馆 1974]

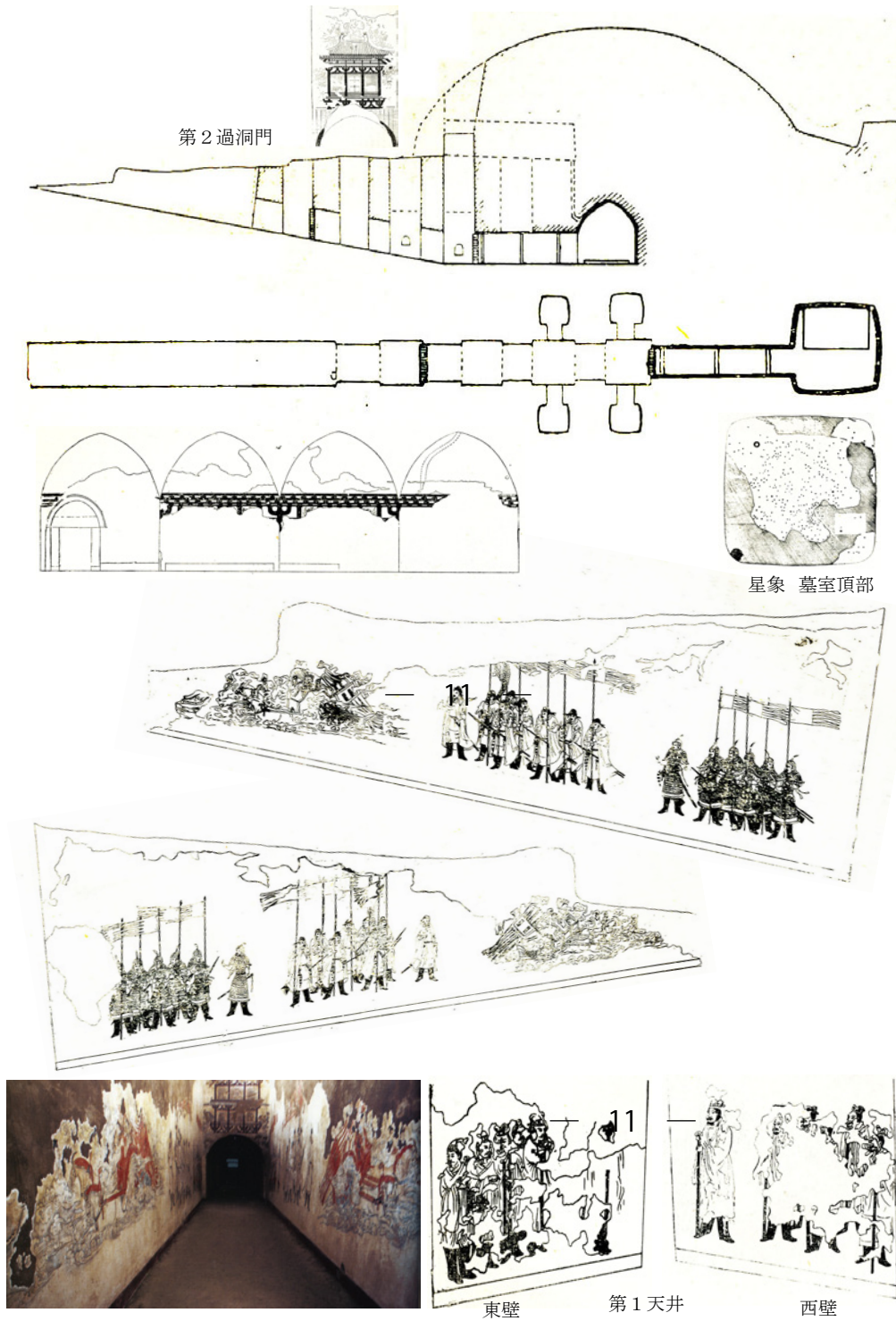


图9 陕西省礼泉長樂公主墓(643) [昭陵博物館1988]



畏獸



畏獸



女侍 突厥族



樂伎と樹木



蓮華を持つ侍女 樂伎と樹木



図10 陝西省礼泉李思摩墓(647) [昭陵博物館 2006]

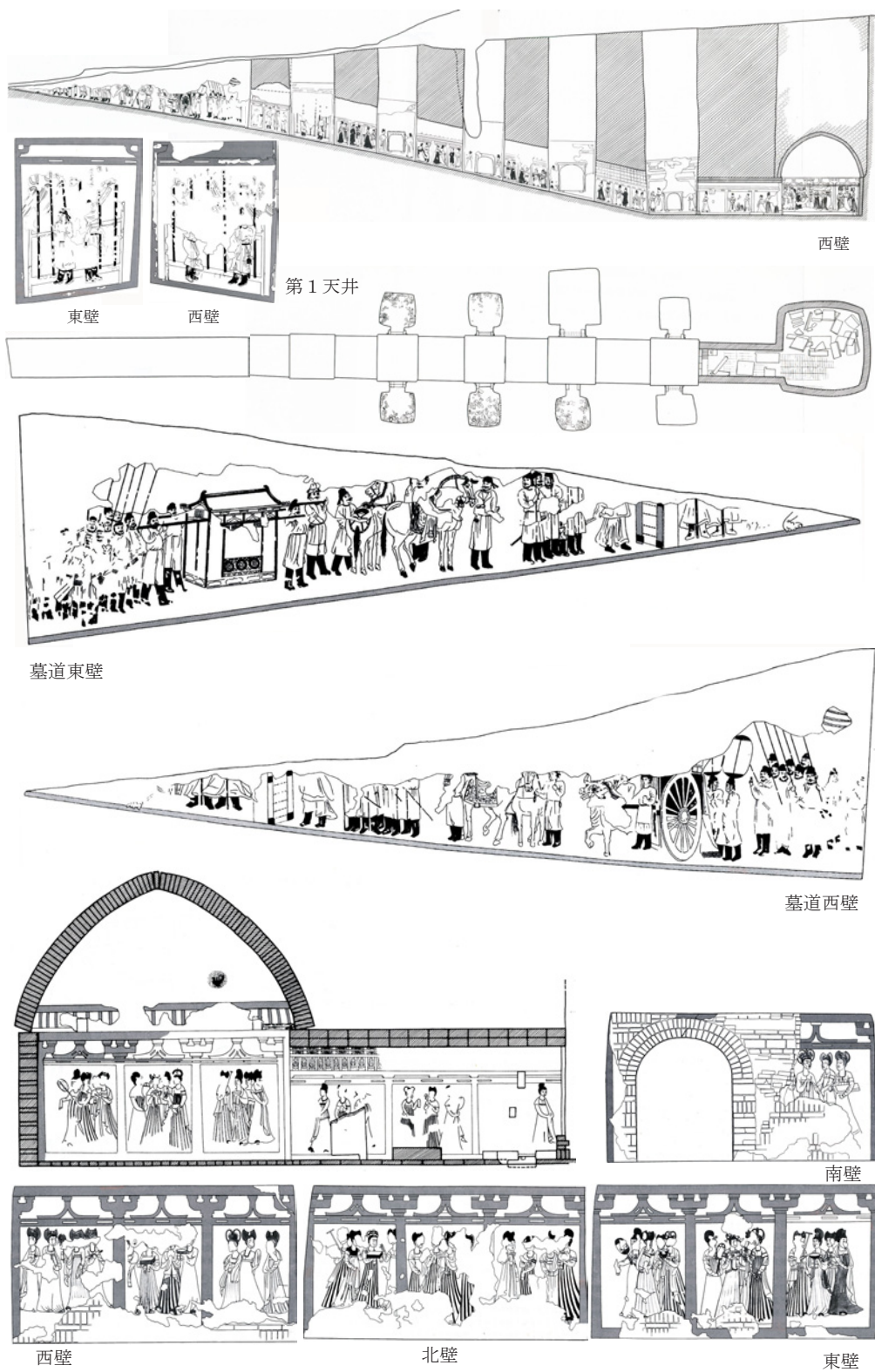


图 11 陕西省礼泉新城長公主墓 (663) [陕西省考古研究所 2004]

の面貌は突厥族の胡人、ソグド人のようである。甬道東西の両壁に畏獣がえがかれる。北朝で発達する図像である。

思摩墓者、頡利族人也、始畢・処羅以其貌似胡人、不類突厥、疑非史那族、故歷処羅・頡利代、常為夾畢特勒、終不得典兵為設(『通典』突厥上)。

李思摩(582—647)は突厥族で、本姓は阿史那。貞観4年(630)、唐は突厥を滅びし、思摩は唐に帰順する。太宗はその誠を喜び、皇姓を賜う。懷化郡王右武衛大將軍に封じる。貞観13年(639)、改めて乙弥泥孰可汗とし、もとの突厥の一部を率いて黄河以北に帰す。貞観21年(647)3月長安において病死し、4月に昭陵に陪葬された〔昭陵博物館2006〕。二女侍図の一人は唐服である。思摩は昭陵の北司馬門に造営された十四国蕃君の一人である(図10)。

陝西省咸陽執失思力墓(664)〔劉呆運・李明・尚愛紅2011〕咸陽國際空港第2期工事にともない発掘された。咸陽郡底張M118は圍溝墓で、圍溝の平面は凸字形で、南北120m、東西102m、斜坡墓道・5過洞・5天井・4龕室・墓室の磚室墓。墓道両壁に出行儀仗図などが描かれる。「大唐故鼎州刺史贈左驍衛大將軍滕州都督駙馬都尉執失府君之墓誌」の墓誌が出土した。執失思力は突厥の酋長である。貞観19年(656)、薛延陀真珠可汗夷南が没し、少子の肆葉護拔灼が即位し、夏州に侵入した。そのとき將軍の執失思力が攻撃、拔灼は逃亡したが、廻紇に殺されたという、また貞観20年(646)、太宗は突厥人の左衛大將軍阿史那社爾を瀚海道安撫太子に任命し、右領軍大將軍の執失思力は突厥の軍を率い、太宗の突厥遠征に参戦にする。蛮夷をもって蛮夷を攻める戦術であった。

陝西省咸陽底張M151(698)〔劉呆運・李明・尚愛紅2011〕封土は一辺28mの四角形、高さ11m。第4過洞のところで墓誌が出土。斜坡墓道・過洞・天井・龕室・甬道・前室・後室。墓道に青龍・白虎、出行儀仗、祥雲紋がえがかれる。墓主は竇孝謹で、武則天通天元年(697)に死亡し、武則天聖歷元年(698)に洛陽で埋葬され、玄宗先天元年(712)移送された。夫人の龐氏と合葬された。

陝西省長安執失奉節墓(658)〔賀梓城1958〕長安郭杜鎮1号墓で、被葬者の執失奉節は突厥人で、執失思力の子、常樂府果毅である。父の執失思力と葬地を異にする。

陝西省礼泉新城長公主墓(663)〔陝西省考古研究所2004〕墓道入口の東西両壁に青龍・白虎図が一部遺存する。墓道両壁に門吏、儀衛、牽馬、擔子、犢車、儀仗、内侍、墓道北壁に闕樓、宮女。過洞・天井・甬道両壁に男侍群、女侍群、列戟(両壁合計12)。墓室四壁に侍女群、頂部に天象図をえがく。侍女は団扇、扠子、杖、長頸壺、盆、盒などを持つ。

陝西省咸陽蘇定方墓(667)〔陝西省社会科学院考古学研究所1963〕大唐蘇君之墓志の蓋のみが出土したが、壁画に10列戟が表現されていることから、三品以上の官僚と推定された。そのご列戟の数や天王俑の年代、埋葬地などから、左驍騎大將軍・国王の蘇定方に比定された〔宿白1982〕。墓道両壁に出行図(牽引馬、儀仗)と青龍・白虎を配置する。青龍は脚・爪の一部が遺存する。周囲に卷雲紋がめぐらされている。西壁の白虎はほぼ完存する。身長5.2m。全身は黒色の卷毛でおおわれ、尾は巻曲し、足で彩雲を踏み、疾走する。まわりは雲気紋でかざられている。尾は斑状の紋様で、股部から左脚側にのびる構図は特徴的である。その尾の意匠は礼泉尉遲恭墓誌(659)の辰像にみられる。第5天井下の東西壁にそれぞれ5戟列架が表現されて

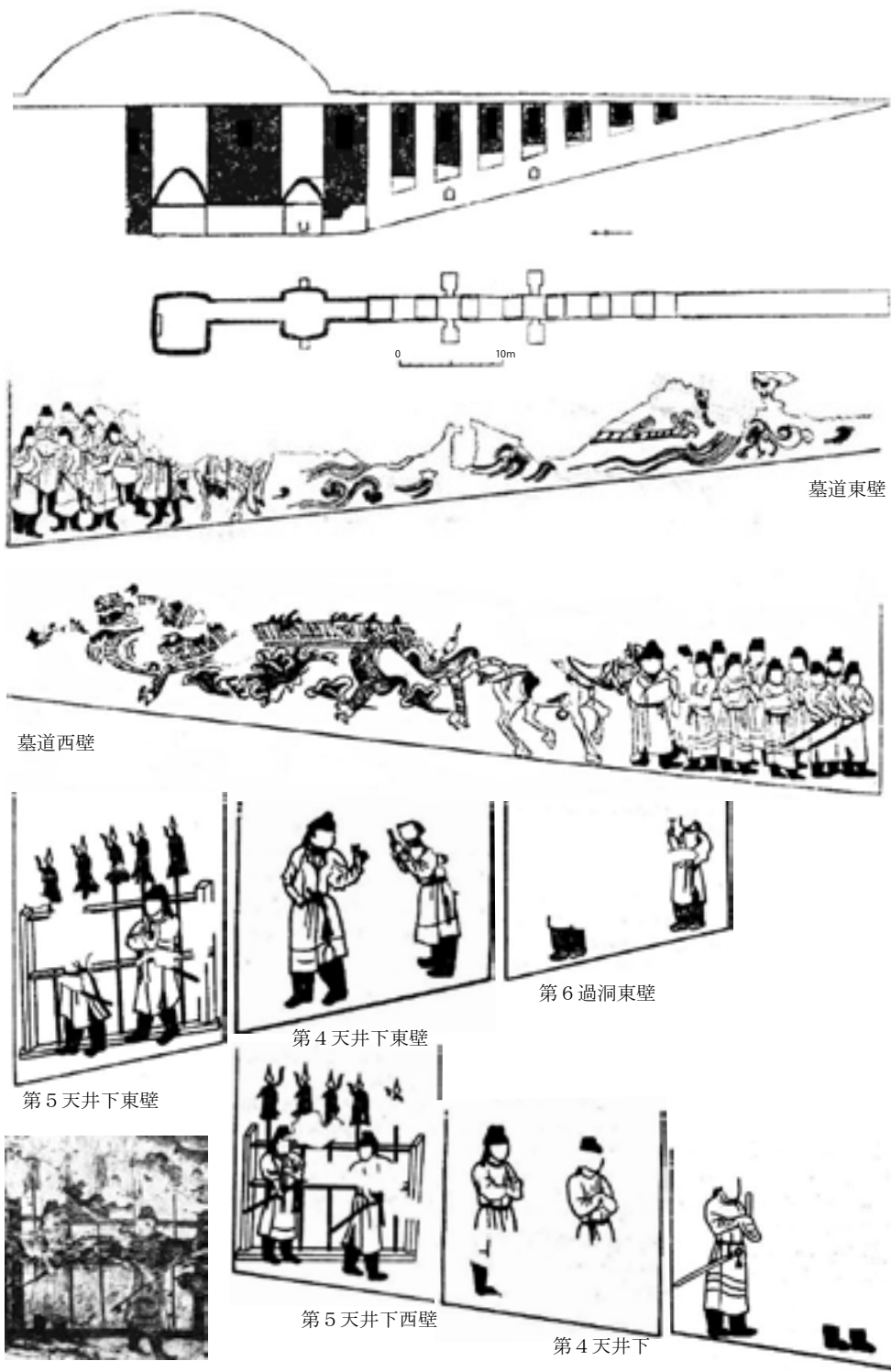


图 12 陕西省咸陽蘇定方墓 (667) [中国社会科学院考古研究所 1963]

第 3 天井下西壁

いる。墓室の壁画は剥落しているが、前後室の天井に星宿図がのこる(図12)。

**陝西省礼泉李勣墓(670)**〔昭陵博物館2000〕 総章2年(669)12月に卒し、翌年2月に太宗昭陵に陪葬された。全長64m。4天井・4過洞・墓室からなる土洞墓。墓道長28.2、幅2.8、甬道10m、幅1.5、墓室長4.6、幅4.7mである。冠帽、鈔帶、班劍などの金属製品が出土している。壁画は墓室東壁に女楽図がある。細身の身体に高髻で窄袖に襦衫を身につける。北壁に舞踏図、北壁から西壁に屏風図がある。屏風は一幅に樹下人物と飛鳥がえがかれる。交衽と左衽の袖衫の女性像で、楽舞人の衣服とことなる。李勣は墓誌に「大唐故司空公太子師贈太尉楊州大都督上柱国英国公李公」である。武徳8年(625)、行軍総管に命じられ、突厥を攻撃する。貞観3年(629)に通漢道行軍総管となり、突厥頡利可汗と白道で戦う。唐は夷男に頡利を伐たせ、真珠毗伽可汗とする。

詔百官送至故城西北、所築墳一準衛、霍故事、象陰山、鉄山及烏徳鞬山、以旌破突厥、薛延陀之功(『旧唐書』列伝第17李勣)。

李勣は貞観18年(644)に遼東道行軍大総管に任じられ、蓋牟城、遼東城、白崖(敵)城等を攻破した。翌年に延陀部落に争乱があり、二百騎で突厥兵を討撃し、烏徳鞬山で戦い破ったという。李勣は突厥や高句麗のいわば、「蛮夷」討伐の将であった。昭陵に陪葬された。

**陝西省礼泉阿史那忠墓(675)**〔陝西省文管委1977〕 昭陵陪葬墓域に位置する。有龕墓道・甬道・墓室からなる塼室墓。墓道東壁は入口部から墓道北壁にかけて青龍、馬・駱駝牽引、儀仗隊(11人)、墓道西壁は入口から墓道北壁にかけて白虎、牛車がえがかれる。過洞の東西壁に男侍、建築(楼閣)、払子・団扇を持つ女侍像がある。第1天井の両壁に6列載があり、なかに虎頭の円形幡をかざるものがある。壁画の儀仗隊の図像(人物の衣冠、神態、兵器およびその配置など)が鄭仁泰墓(664)と酷似し、同じ画師が描いた可能性がつよいという。十二列載が表現されている。『唐六典』に「上柱国柱国帶職事二品以上…門十四戟上柱国柱国帶職事三品以上中都督府上州上都護門十二戟」とみえ、阿史那忠が「右驍衛大將軍(正三品)贈荊州大都督(從二品)薛国公(從一品)」であることと符合する。阿史那忠は頡利をとらえた功績で左屯衛將軍に命じられている。上元初年(674)に歿し、鎮東大將軍が贈られ、昭陵に陪葬された(『旧唐書』列伝第59)。墓誌では上元2年(675)5月24日に卒し、同年の10月15日に埋葬された。阿史那忠墓の墓室構造や壁画構成、とくに白虎図像はオラーン・ヘレム墓のものと類似する。

**陝西省西安独孤思貞墓(697)**〔中国社科考1980〕 長安城の東北角から東北方向に約10kmの地点に独孤氏一族の墓地があり、独孤思貞、独孤思敬と妻元氏(思敬)との合葬墓(709)、楊氏思貞墓(687)が発掘された。全長31m。斜坡墓道(5過洞・5天井、23.6×1.7m)、甬道(3.8×1.3m)、墓室(3.5×3.4m)からなる。第4過洞の両龕室がつく。龕室内で小型銅鐙・銅鑣轡、陶俑(馬・駱駝・牛・猪・鶏・鴨、竈)、墓室門口の甬道右壁にそって文官俑2体、左壁に鎮墓獸と武士俑2体、墓室内で男侍・女侍、馬俑と馬具(杏葉形飾金具・銅環)が出土した。独孤思貞は万通天2年(697)に歿し、神功元年(698)に埋葬された。墓誌蓋の銘は「大周故朝議大夫行乾陵令上護軍公士独孤府君墓誌銘并序」である。独孤思貞墓の墓室構造や鎮墓獸、小型馬具、馬俑・駱駝俑などの明器など、オラーン・ヘレム墓のものと類似し、同時期の墓葬であることをしめす(図14)。



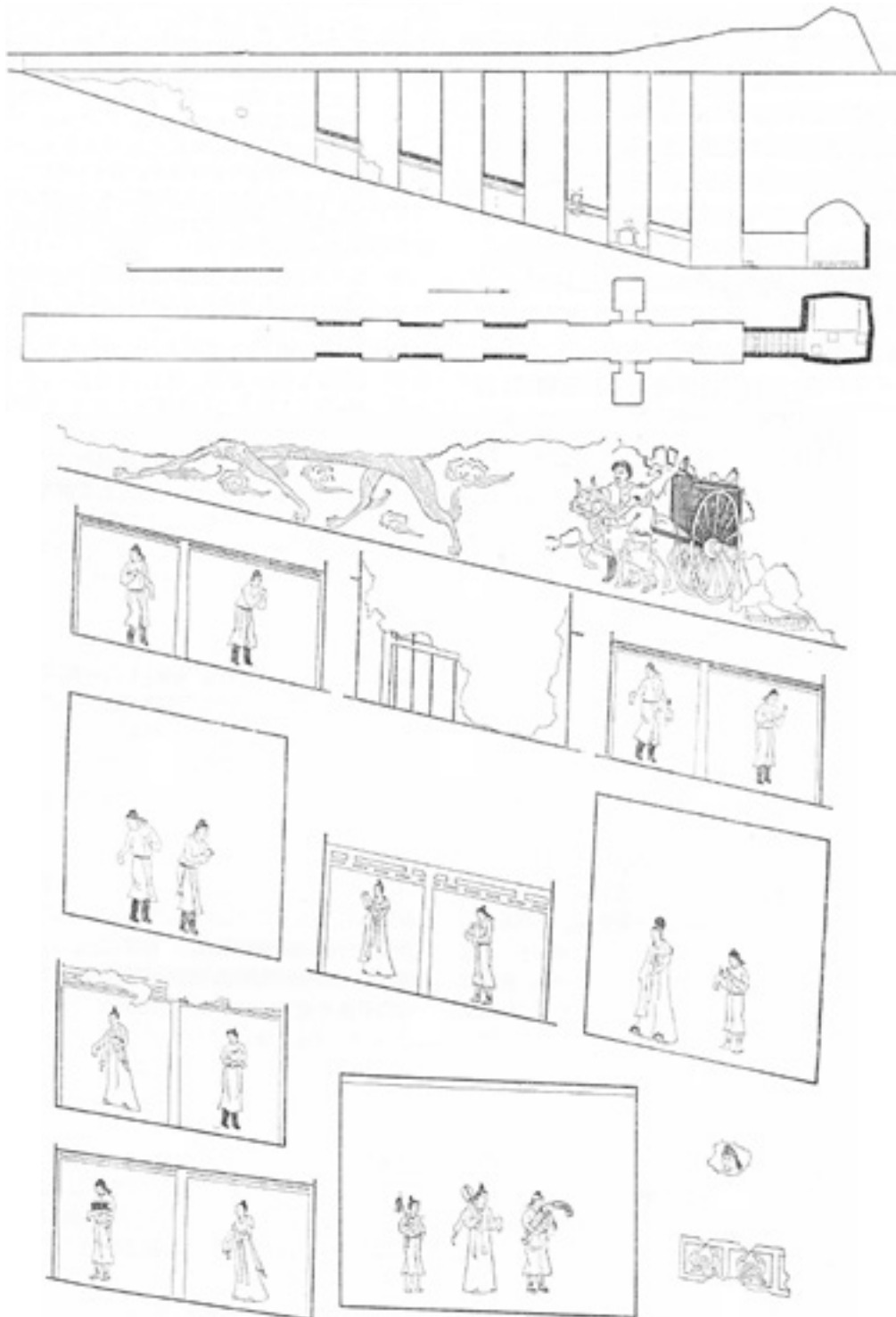
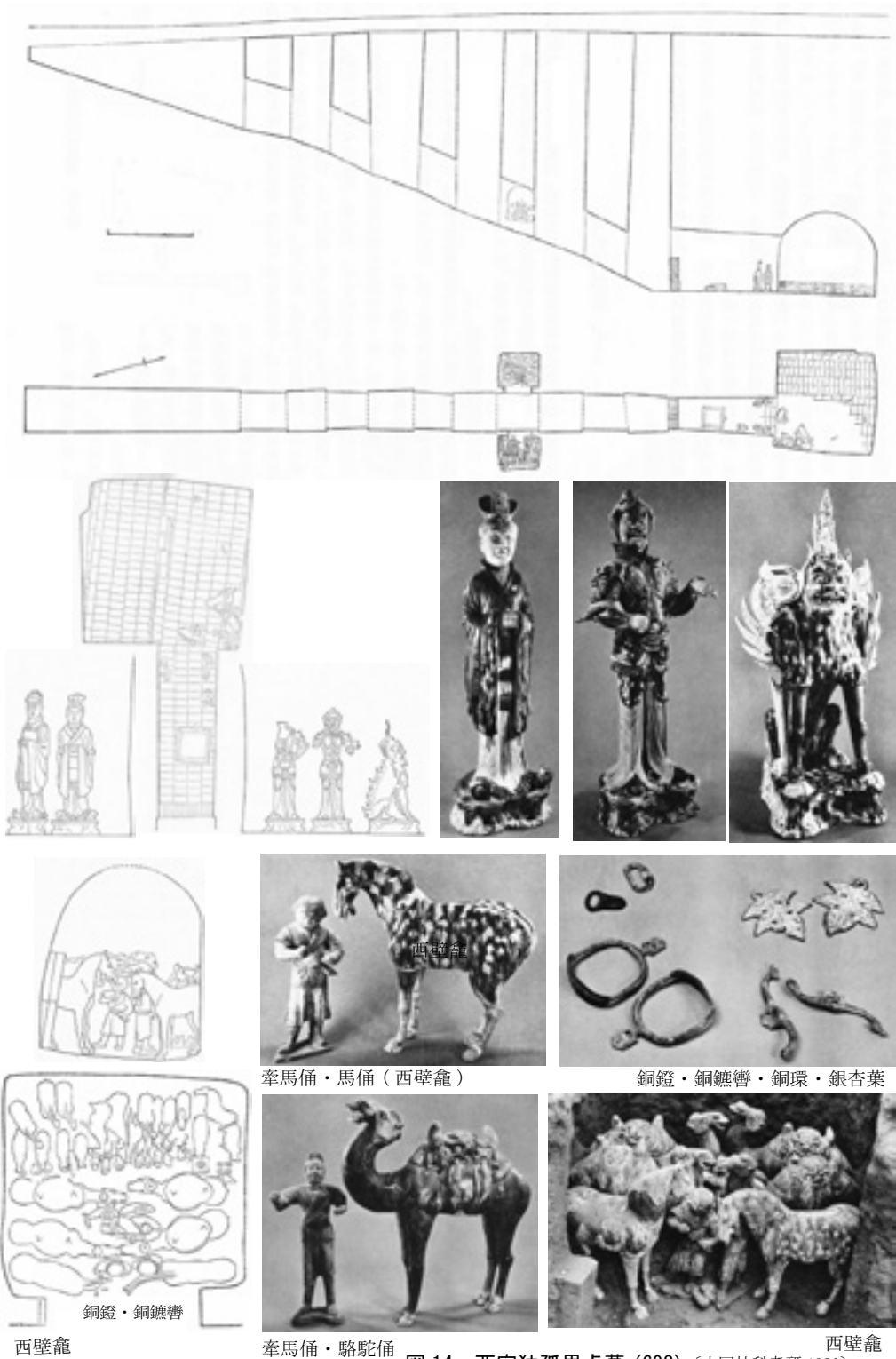


图 13 陕西省礼泉阿史那忠墓 (675) [陕西文管理委 1977]



西壁龕

牽馬俑·駱駝俑

西壁龕

圖 14 西安独孤思貞墓 (698) [中国社科考研 1980]

#### IV オラーン・ヘレム墓の壁画画像

オラーン・ヘレム墓の墓室構造（斜坡墓道・天井・過洞・甬道・墓室）、壁画画像（青龍、白虎、旗旌、列戟、男・女侍、門闕、牽馬、蓮華、雁、飛鳥 樹下人物）、副葬品（貨幣、鈔幣、馬具、装飾品）の諸属性を分析する。

##### オラーン・ヘレム壁画の青龍・白虎画像

墓道東壁の青龍は長さ7.6m、高さ1.8mの画像。身体の骨格・中心線は青色で表現し、胸がいと腹部下辺、左足にかけて太い朱線で縁どる。左前足を腹部の輪郭線まっすぐに突き出す。足首をかえすようなポーズをとる。下腹部と右後足の交点は約140°の鋭角となっている。白虎のばあいは曲線的である。背から尾に鋭利な線で背鱗をえがく。尾の根元に火焰紋を装飾する。四足は爪の細部まで表現する。左前足をのぞく三足のつま先は雲気紋で装飾される。

西壁の白虎画像の特色は這う姿態で、四足に雲気紋で飾られ、同じ雲龍紋をはき出す。背鱗が表現されているが、白虎画像としては例外的である。朱色の線で輪郭をとる。右足と下腹部下辺は直線的である。背から尾にかけて、背鱗を表現する。尾の端部は丸味をもつ。尾の中間にねじれのような痕跡があり、部分的にとぎれる。四足のつま先はいずれも雲気紋化している。背の斑点は朱色で花卉状を呈する。盛唐期の白虎のように花紋化していない。

青龍・白虎画像の粉本があり、壁面に転写するかたちで描かれたにちがいない。体軀（尾をのぞく）の幅・高さの指数は47、白虎45で、その比率はほぼ同じである。図面を反転し重ねあわせれば明白である（図15）。墓道両壁の一定の空間全体に表現しているため、青龍・白虎の大きさはほぼ等しくなっている。白虎の尾の中間に結び目のようになっている。画師の心理状況を推測させる。尾の先端が円まるのは様式的特徴である。青龍の粉本があり、それを反転して白虎が描かれたのであろう。白虎に背鱗が表現されるのは例外である。唐代では金勝村6号墓（山西省太原）の白虎に鱗状の輪郭が描かれる。青龍の画像を基本にして白虎像が描かれたのであろう。オラーン・ヘレムの青龍・白虎画像は阿史那忠墓の画像にもっとも類似する。

蘇定方墓の白虎の長さは6.5m（身体5.2m）、阿史那忠墓の白虎は6.5～7.0m、懿徳太子墓の青龍の長さは約7m、高さ2.2m、白虎残長6.8m、高さ2mで8mにちかい。永泰公主墓は残長6.0mで、8.0m以上。李憲墓の青龍・白虎は約6mである。

墓道に青龍・白虎像が表現されるようになるのは北朝後期以降である。6世紀中葉の湾漳墓（550）などに出現する。墓道に青龍・白虎がえがかれ、四神壁画の表現空間が変容する。四神思想は十二支像思想とともに墓室壁画に表現される（図16）。

墓室・墓道の規模、墓道の画像の構成などに関係する。オラーン・ヘレム墓のばあい、青龍・白虎画像は墓道壁面の半分以上をしめている。同時期の突厥族の右驍衛大將軍阿史那忠墓に匹敵する大きさである。僕固乙突墓（678）も右驍衛大將軍である。

青龍画像は東魏の茹茹公主墓（550）の龍身の背や脚部縁端にC字形唐草紋が表現されている。7世紀後半段階で固原思索岩墓（664）や太原金勝村7号墓のように龍身の輪郭が唐草紋化する

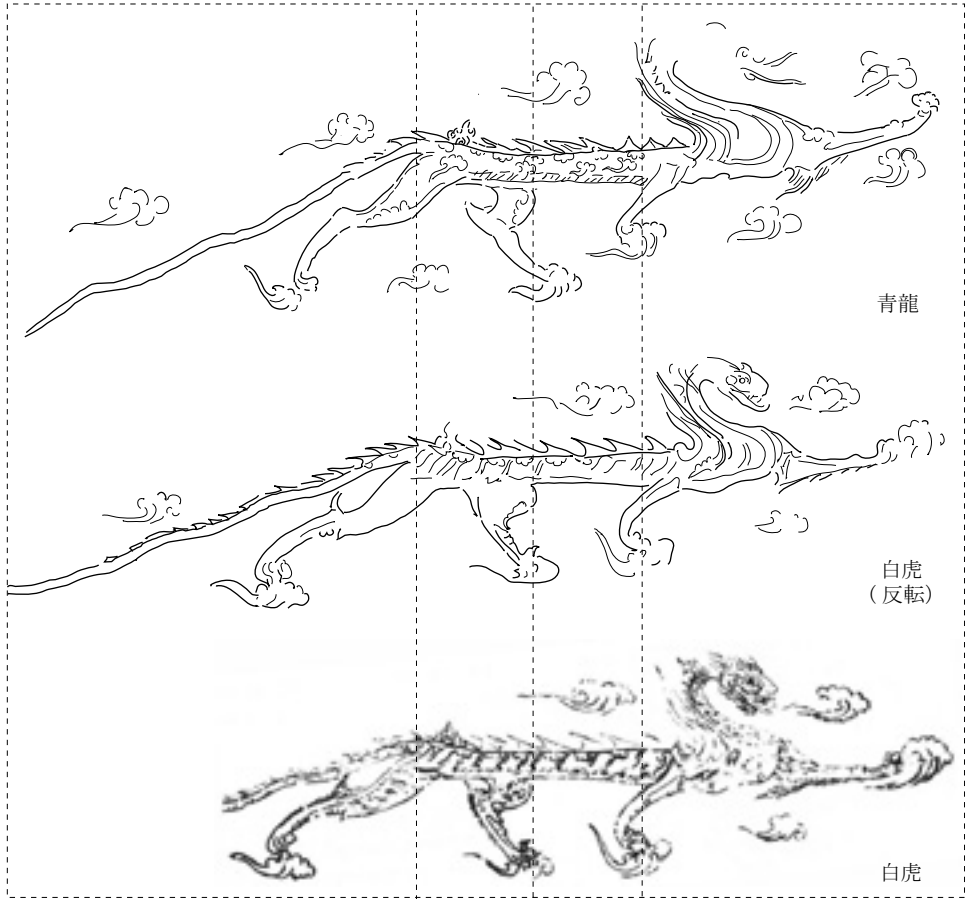


図 15 オラーン・ヘレム墓青龍・白虎図像の比較

とともに、背鱗が鋸歯紋様化（鋸歯紋裝飾）される。礼泉・阿史那忠墓(675)に唐草紋様化がみられる。咸陽・蘇定方墓では、龍身が裝飾化（唐草紋裝飾）するとともに、尾が垂れ下がり、後足にからませたり、もぐるような構図となる。高元珪墓(756)は中・晩唐期で、青龍の背から尾にかけて連続して、鋸歯紋状の鱗があり、角も退化している。周囲を花紋で飾る。高松塚古墳の青龍も鋸歯紋化し、青龍の輪郭は縞状紋によってなされている。青龍・白虎の胴部（腹部）に縞状紋で輪郭をとる手法は、初唐の太原南郊墓あたりから顕著になる。冉仁才墓(654)の青龍の脚部は花紋化し、腹部に縞状紋の輪郭がある。

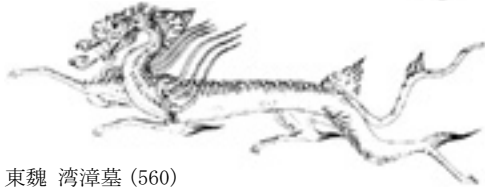
茹茹公主墓の白虎図像は花紋・雲気紋などが裝飾され、前進、引導する姿態である。背に唐草紋が裝飾される。金勝村7号墓の尾には斑点が表現される。青龍も同様の表現である。体躯の頸から尾にかけての下縁辺部を刻み目紋で表現される。そのため白虎では一般にみられない背鱗状の紋様もある。斑状の尾は蘇定方墓の白虎にもみられ、その尾は左足に絡まる。またその白虎の体躯に花紋が裝飾されている点は特徴的である。周囲の花紋がからまるような表現が



東魏 茹茹公主墓 (550)



東魏 崔芬墓 (551)



東魏 灣漳墓 (560)



東魏 灣漳墓



唐 太原南郊墓



唐 太原南郊墓



唐 蘇定方墓 (667)



隋 耀州葯王山墓石棺



統一新羅 芬皇寺軒丸瓦



唐 阿史那忠墓 (675)



日本 高松塚古墳



日本 高松塚古墳



唐 懿德太子墓 (706)



唐 乾陵石刻



唐 李憲墓 (741)



唐 李憲墓

圖 16 北朝・隋唐・突厥・統一新羅・日本の青龍・白虎圖像

なされている。青龍や白虎の尾が後足にからまる図像は隋の耀県薬王墓石棺や蘇定方墓壁画、乾陵石刻にみられる〔崔漢林 1986〕(図 16)。

### オラーン・ヘレム青龍白虎図像様式

四神図像の表現空間 四神図像は北朝末を画期として表現空間が変化する。

I 墓室内天井部—太原金勝村 4 号墓、太原金勝村 6 号墓、太原金勝村 7 号墓〈青龍・玄武〉

II 墓室壁面—蘇思昂墓〈北壁に玄武、南壁に朱雀〉、唐安公主墓〈北壁に玄武、南壁に朱雀〉、張九齡墓

III 斜坡墓道—蘇定方墓、新城長公主墓

IV 石棺四神図像—李和墓、李静訓墓、李寿墓

墓道の東西両壁の龍・虎は四神としての青龍・白虎である。方向神としての四神である。

**畏獣の系譜** オラーン・ヘレム墓の鬼神像は第 2 過洞の後壁に墓の入り口にむかって描かれる。「畏獣」の範疇にはいる〔長広敏雄 1969、東潮 1999〕。畏獣像(鬼神・鬼面)・力士像・門衛像・胡人像は神怪図像として一括しえる。中国古代壁画の畏獣のなかに蕭宏墓碑・馮邕妻元墓など、両足で立つ擬人形の鬼神がある〔長広 1969〕。非鬼面紋で虎よりの怪獣もある。これらの畏獣は北魏の正光初年(520)年ごろ流行しはじめる。南北朝から隋唐の時代に墓室、画像石・石窟寺院壁画などに表現される。また高句麗壁画の畏獣は北朝から伝播した。日本の藤ノ木古墳の金銅鞍金具(南朝製)にもみられる(図 17)。

畏獣は東魏茹茹公主墓(550)、東魏崔芬墓(551)、東魏湾漳墓(560)、北齊徐顕秀墓(571)・梁蕭宏墓碑図像など北朝・南朝墓で流行し、李思摩墓(647)のように唐代までつづいて表現される。鬼神もふくめ、畏獣は辟邪の意味をもつ。北朝墓では葬列を先導する方相氏の性格ものこしている。また北朝墓では墓室入口に鎮墓獣が配置される。北朝・南朝墓では怪獣の形がことなるが、同じ性格である。北朝の鎮墓獣の呪術性は唐代に継承する。三彩俑として明器的性格をより帯びるようになる。オラーン・ヘレム墓の鬼神像はたんなる鬼面ではなく、両手・身体が表現された畏獣である。

太原徐顕秀墓(571)の門額に鬼神、済南道貴墓(571)の甬道門の鬼神像がある。鬼神像は墓門に表現される、内外の結界の空間にあたる。オラーン・ヘレム墓の鬼神像は鎮墓獣と守墓人としての門衛像、武士俑と一体のものである。独孤思貞墓の陶俑の組みあわせと同じであった。

**樹下人物屏風画** オラーン・ヘレム墓の墓室内に樹下人物屏風画がえがかれる。屏風画は北朝末期に出現する。山東省臨朐崔芬墓(552)に南朝の竹林七賢図像様式の樹下人物図像がみられる。淮河流域から山東半島にかけての地域は南朝と北朝(東魏)の領域を接するところであり、政治的・文化的に影響関係があった。屏風画は北朝、隋の伝統を継承して唐代に流行する。屏風画の図像は樹下老人、樹下貴婦・侍女、楽舞、花鳥、雲鶴などである〔張建林 1998〕(図 18)。

**蓮華** 墓室空間に蓮華紋(蓮華化生)が表現される。蓮弁の中から蓮華唐草紋が咲きほこるかのようである。同時期の李思摩壁画に蓮華を持つ侍女がみえる。蓮華紋は天を象徴する。

**門楼** 門楼図は墓道後(北)壁にえがかれる。昭陵陪葬墓の長樂公主墓などと酷似する。門楼は宅の内外の境界で、墓道から墓室への入口に門楼を描く。門楼は墓道後(北)壁から墓道両壁



畏獣



武士俑



武士俑



鎮墓獸



オラーン・ヘレム墓



鎮墓獸



婁叡墓 (570)



道貴墓 (571)

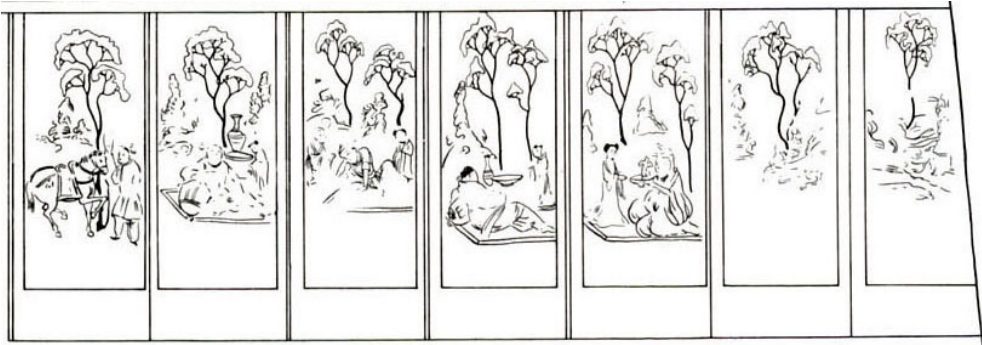


徐頭秀墓 (571)

図 17 畏獣・鎮墓獸・武士俑



オラン・ヘレム墓

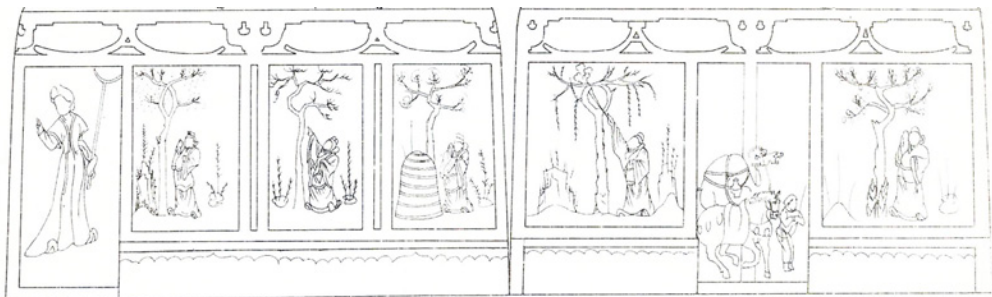


山東崔芬墓(670)



陝西礼泉李勣墓(670)

陝西礼泉燕妃墓(671)



山西太原南郊唐墓

図18 屏風画の変遷



に表現されるようになる。

**列戟** 墓道の両壁に3竿ずつの「列戟」が描かれている。木架に吹き流しの旗旌がつく武器である。鋒先は戟でなく、矛や槍である。架と旗旌付きの武器である〔申秦雁 2001〕。

これまで唐代の列戟は、李寿墓で7竿一對14竿（左武衛大將軍、淮安王、贈司空）、段簡壁6竿一對12竿、李氏定襄県主は6竿一對12竿、新城長公主墓は6竿一對12竿、阿史那忠墓（右驍衛大將軍薛国王・従一品）（675）は6竿一對12竿、蘇定方墓（左武衛大將軍）は5竿一對10竿、李賢（706）は7竿一對14竿、永泰公主李仙惠墓（中宗7女）は6竿一對12竿、懿徳太子李重潤（中宗長子）墓は6竿一對12竿、万泉県主薛氏墓は5竿一對10竿である。

凡太廟太社及諸宮殿門、各二十四戟、東宮及一品以下、諸州門、施戟有差、凡太廟太社及諸宮殿門各二十四戟、東宮諸門施十八戟、正一品十六戟、開府儀同三司嗣王郡王若上柱国柱国帶職事二品以上及京兆河南太原府大都督大護門十四戟、上柱国柱国帶職事三品以上中都督府上州上都護門十二戟、国公及上護軍帶職事三品若下州門一十戟（『唐六典』卷4）時期がくだるが、元和7年（812）新羅国王（憲徳王）にたいして「戟」が賜与されている。

以新羅大宰相金彦昇爲開府儀同三司、檢校太尉、使持節、大都督雞林州諸軍事、雞林州刺史、兼寧海軍使、上柱国、封新羅国王、仍冊彦昇妻貞氏爲妃。…新除新羅国大宰相金崇斌等三人、宜令本国准例賜戟（『旧唐書』本紀第15 憲宗下）

冊立王爲開府儀同三司檢校太尉持節大都督雞林州諸軍事時節充寧海軍使上柱国新羅王。冊妻貞氏爲妃賜大宰相金崇斌等三人門戟（『三国史記』新羅本紀第10）

## V オラーン・ヘレム壁画墳の出土遺物

**冠帽** 金銅冠は円形の金銅帯に3本の骨架が鋳留されている（図19）。

李勣墓の三梁進徳冠は径20cm、高さ23cm。側面に六花紋の金銅飾金具がつく。冠帽について「三品以上三梁」という規定がある、李勣の冠帽は太尉楊州大都督上柱国英国公の身分と合致する〔昭陵博物館 2000〕。李勣は総章2年（669）に卒し、翌年に埋葬された。

親王、遠遊三梁冠、金附蟬、犀簪導、自筆。…進賢冠、三品以上三梁、五品以上兩梁、犀簪導。九品以上一梁、牛角簪導（『旧唐書』卷45）

貞観八年（634）…五月辛未朔、日有蝕之、上初服翼善冠、貴臣服進徳冠（『旧唐書』卷3）。

オラーン・ヘレム墓の冠は三梁冠で、李勣の位に匹敵する大都督上柱国英国公級のもので、被葬者の身分を示す。李勣・オラーン・ヘレム墓の冠は唐代の冠帽として稀な実物資料である。

**貨幣** ビザンティンのヘラクリウス1世金貨とその模製の金貨、ササン・ペルシャのホスロー2世銀貨模製の「金貨」もある。そのほか肖像を表現した銀装貨幣があり、突厥の金工技術がうかがえる（図版12）。両国の貨幣は南北朝・隋唐の境域内にひろく分布する〔夏竦 1957・1958、岡崎敬 1973、孫莉 2004〕（図20）

### ササン・ペルシャ貨幣

ホスロー1世（531-578）金貨；新疆阿斯塔那I-3号墓1枚、河南陝県劉偉夫婦墓（584）、陝西耀県寺坪隋舍利塔基（604年）1枚、内蒙古呼和浩特坝子村古城3枚



劍



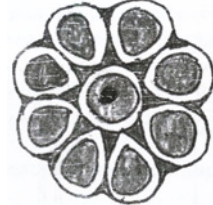
李勣墓



金銅冠



金銅三梁進德冠 (李勣墓)



金銅冠帽裝飾  
金銅冠(オラーン・ヘレム墓)



劍裝飾金具



金蓮華紋飾金具



オラーン・ヘレム墓

図19 陕西省礼泉昭陵李勣墓(669)とオラーン・ヘレム墓 [昭陵博物館2000]



TAM62 ビザンティン (吐魯番阿斯塔那) TAM138



ヘラクリウス 1 世 (610-640) (西安何家村)



ホスロー 1 世 (531-579) (河南陝県)



ホスロー 1 世 (河南陝県)



ホスロー 2 世 (590-628) (西安)



仿製品 (西安)



ホスロー 2 世 (吐魯番雅爾湖)



ホスロー 2 世 (吐魯番雅爾湖)



アルダシール 3 世 (628-629) (吐魯番)



アルダシール 3 世 (吐魯番)



ホスロー 2 世 (西安何家村)



ホスロー 2 世 (庫車)

図 20 中国出土のビザンティンとササン・ペルシャの貨幣

ホルマズド4世(578-590)銀貨；阿斯塔那1-3号墓1枚

ホスロー2世(590-627)銀貨；新疆克孜勒蘇567枚〔李遇春1959〕、吐魯番雅爾湖、阿斯塔那325号墓、338号墓(667年)、庫車〔夏竦1957〕、西安何家村窖藏〔陝西博1972〕、西安近郊30号墓1枚、陝西長安県天子峪唐塔基6枚、太原金勝村5号墓

ヤズドガルド3世(632-651)；阿斯塔那302号墓(653年)

### ビザンティン貨幣

ユスティニアヌス1世(527-565)；阿斯塔那1-3号墓1枚(模製)

ユスティニス2世(565-578)；陝西咸陽底張湾隋墓1枚

ヘラクリウス1世(610-641)；咸陽独孤羅墓(599)1枚、西安何家村窖藏、西安西郊土門三橋1枚(模製)

コンスタンス2世(641-648)；和田

新疆吐魯番の高昌古城でシャープール2世(309-379)銀貨10枚、アルデシール2世(379-383)銀貨7枚、シャープール3世(383-388)銀貨3枚がみつまっている〔夏竦1966〕。

阿斯塔那墓群で永徽4年(653)の302号墓でヤズドガルド3世銀貨、顕慶元年(656)の325号墓、龍朔3年(633)の322号墓、乾封2年(667)の338号墓でホスロー2世銀貨、武徳9年(626)の339号墓で銀貨が出土した。吐魯番雅爾湖で高昌麹氏(499-640)時代の6・56号墓でもホスロー2世の銀貨がみつまっている。ササン朝最後の王のヤズドガルド3世(632-651)は唐では伊嗣侯(伊嗣侯)として知られ、貞観21年(647)に遣使し、入唐した〔夏竦1966〕。

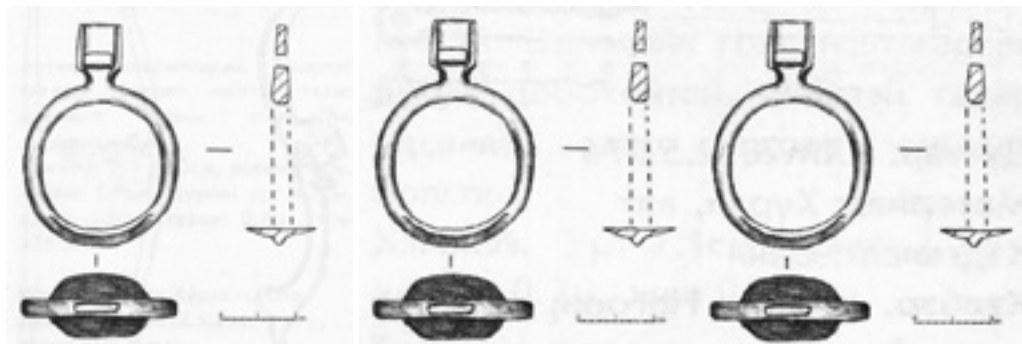
ササン・ペルシャとビザンティン貨幣が7世紀代の西安や新疆、そしてモンゴルに分布する。隋唐墓とともに高昌国の新疆アスターナ墓群や突厥国のオラーン・ヘレム墓で出土した。天山山脈・アルタイ山脈の北の突厥第一帝国期の境域がひろがる。東突厥から西突厥、西方のビザンティン帝国との交通路も開けていた。唐と突厥国、高昌国との交渉をものがたる文物である。

**馬具** オラーン・ヘレム墓でミニチュアの金銅鐙3件、鑣轡1件が出土している。1対のものが高6.3cm、幅4.4cm、径2.2cm、55.5g、他の1件は高さ6.3cm、幅4.4cm、径2.0cm、重25.4g。鐙・鑣轡は長8.6cm、幅1.2cm、重21.7gである。精巧なつくりである(図版12)。卡坦達、庫徳爾格4号突厥墓で鑣轡が出土している〔孫機2001〕。

この小型の馬具の明器は唐の葬具の一種である。墓室構造や壁面に共通性のある新城公主墓などで同形の金銅馬具がみられる。都の長安の工房で製作され、将来されたものであろう。

日本の三重県鳥羽八代神社や石川県上荒屋遺跡など唐製ないし唐様式の轡がある〔津野仁2012〕。唐系の鈎帯や唐鏡、唐三彩など唐の国際関係をしめしている(図21)。

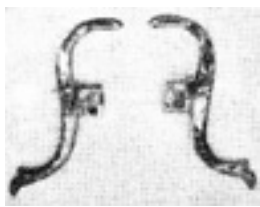
- ・寧夏回族自治区固原史道洛墓(646)
- ・陝西省西安独孤思貞墓(618)〔中国考研1980〕銅鐙3(高7.2cm)・銅鑣轡6(長7.3cm)・銀杏形飾物6(長5.8cm)・銅環2、西安李文貞墓(817)〔陳国英1981〕鉛鐙2(高3.3cm)、礼泉新城長公主墓(663)〔陝西省考研2004〕銅鑣轡(長6.2~9.2cm)、銅鐙(高5.8cm)、富平李鳳墓(675)〔富平県文1977〕金銅輪鐙8(長4.0cm、幅3.0cm)
- ・北京市史思明墓(762)〔北京市文研1991〕鉄地金張鐙、鉄地金張銜(長26.2cm)
- ・河南省偃師李園崔絢墓(783)〔中国社科考2001〕鉛鐙(高2.7cm、幅2.0cm)



オラーン・ヘレム墓



オラーン・ヘレム墓



西安薛莫墓 (728)



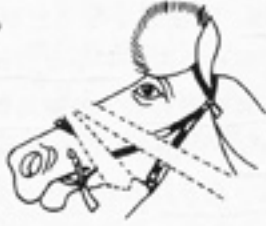
礼泉鄭仁泰墓 (664)



渤海トロイツコエ墓



クトアールケ4号突厥墓



太原北齊婁叡墓



カタンタ突厥墓



富平李鳳墓



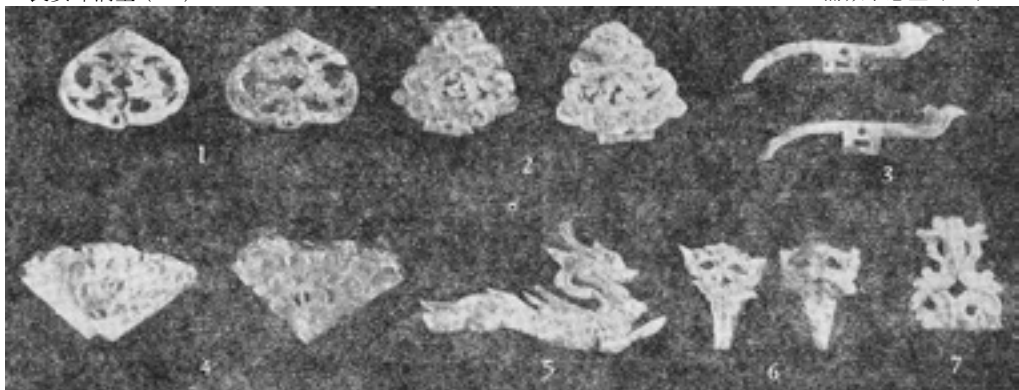
長安韋洞墓 (708)



統一新羅扶蘇山城



蒲城李憲墓 (742)



富平李鳳墓 (675)

図21 唐・突厥・統一新羅・渤海の鐙・鑣轡 [孫機 2001 他]

・吉林省揚屯大海猛、トロイツコエ(渤海)〔譚英杰 1990〕、扶蘇山城(統一新羅)(図 21)  
 独孤思貞墓で2件の銅鐙は西壁龕の馬俑の腹下、1件は墓室内馬俑の側、銀杏形飾物は墓室東南隅の馬俑付近で出土している。西壁龕は2頭の馬、4頭の駱駝(俑)画に李鳳墓では金銅製の杏葉形飾と金銅鐙が伴出している。いずれもミニチュアの明器である。葬具として金銅製の馬具が副葬された。偃師李園崔絢(右千牛衛彛事參軍)墓の鐙は明器で馬俑に付加したものと推測されているが、馬俑の出土じたいは不明。李文貞墓と同じ鉛製である〔中国社科考 2001〕。

## VI 壁画からみた7世紀の東アジアの国際関係

突厥国家の発展段階は三時期に区分される(護雅夫 1971)

I 突厥第一可汗国期(552~630)

II 唐の羈縻支配期(630~679)

III 東突厥第二可汗国期(682~744)

貞観4年(630)、唐の李靖の征討軍によって頡利が降服し、突厥第一帝国は瓦解した。薛延陀の真珠毗伽可汗が唐の冊立をうけ、羈縻支配下にはいった。このころ太宗は諸蕃の君長から「天河汗」と尊称されたという。

突厥尽為封疆之民。於分置单于、瀚海二都護府。单于都護領狼山雲中桑乾三都督、蘇農等一十四州瀚海都護領瀚海金微新黎等七都督、仙萼賀蘭等八州、各以其首領為都督、刺史(『旧唐書』卷 194 上)。

オラーン・ヘレム墓の年代はこの羈縻支配期にあたる。羈縻支配関係において「臣たる諸国・諸族の首長が死亡すれば、必ず詔してその後嗣を冊立する権利と義務を保有した」〔護雅夫 1967〕という。

### 十四国蕃君長と突厥

昭陵は貞観10年(637)に寿陵としての营造が始まり、貞観23年(650)に太宗が埋葬された。永徽元年(650)に「十四国蕃君長」の石像物が立てられた。その記録どおり昭陵北司馬門跡の調査によって石像座とともに石像本体が出土した〔孫遲 1984、陝西省考古研究所 2006、張建林・王小蒙 2006〕。十四国蕃君長のなかで鉄勒・突厥族が5人であり、太宗・高宗代の唐と突厥などの政治的関係がわかる(図 22)。

オラーン・ヘレム墓墳の被葬者問題を検討するため、昭陵の十四国蕃君長石像の突厥人の身分や葬地などについて検討する〔孫遲 1984〕

上欲闡揚先帝激烈乃令匠人琢石寫諸蕃君長貞観中擒伏歸化者形狀而刻其官名…十四人列于陵司馬北門内九峻山之陰以武功乃又刻石為常所乘破敵馬六匹于闕下也(『唐会要』卷 20)

- ・突厥頡利可汗右(左)衛大將軍阿史那出(咄)苾(634年、洛陽濁水の東に埋葬)
- ・突厥頡(突)利可汗右衛大將軍阿史那什鉢苾(631年、葬地不明)
- ・突厥乙彌泥孰候利苾可汗右武衛大將軍阿史那李思摩(647年、昭陵陪葬)(図 10)
- ・突厥都(答)布可汗右衛大將軍阿史那杜爾(655年、昭陵陪葬)

- ・薛延陀真珠毘伽可汗（645年、葬地不明）（図22）
- ・吐番贊普（図22）
- ・新羅樂浪郡王金貞（真）徳（654年、慶州金京・沙梁部）
- ・吐谷渾河源郡王烏地也拔勒豆可汗慕容諾曷鉢
- ・龜茲王訶黎布失畢
- ・于闐王伏闐信（図22）
- ・焉耆王龍突騎支
- ・高昌王左武衛將軍麴智盛（図22）
- ・林邑王范頭黎
- ・帝那伏帝國王阿羅那順

この十四国蕃君長の14人のうち唐の將軍、大將軍に任じられたのは8人、ほかの6人は本国王号、可汗号である。長安に入朝しないもの4人である。頡利可汗は長安で卒し、突利は長安への道中で歿した。麴智盛と阿羅那順の死亡地と葬地は不明である。思摩と杜爾は昭陵に陪葬された〔孫遲1984〕。

**頡利可汗** 左衛大將軍阿史那咄苾である。貞觀4年(630)、唐の李勣の軍は突厥の頡利可汗を攻め、捕ら、長安までおこった。降服した頡利は右衛大將軍に任命された。貞觀8年(634)に死亡する。固有の礼式に従って濁水(渭水の支流)の東で火葬された。帰義王の号が贈られ、荒の諡が賜った(『旧唐書』突厥伝、山田信夫1972)。葬地は不明である。

**突厥突利可汗阿史那什鉢苾** 貞觀4年(630)に右衛大將軍号が授けられた。北平郡王に封じ、七百戸の食邑を与えられた。配下の兵士、領民のところに順州、祐州などの州を置き、領民をひきいて本国に帰らせた。太宗は貞觀5年(631)、突利をよびよせて入朝させたが、并州道(太原付近)まで来て病気になるて死んだ。29歳であった。太宗はかれのために葬式を行ない、中書侍郎の岑文本に命じて、その碑の銘文をつくらせた(『旧唐書』突厥伝)。貞觀5年(631)に「右衛大將軍順州都督北平郡王阿史那什鉢苾卒」とみえる(『旧唐書』本紀第三太宗下)。

**突厥乙沱泥孰候利苾可汗阿史那思摩墓(647)** 右武衛大將軍で、記録のとおり昭陵陪葬墓域で発掘された。墓誌によると貞觀21年(647)に埋葬された。思摩は都で没している。太宗は兵部尚書・夏州都督の号を追贈し、昭陵に陪葬させ〔思摩の出身地の〕白道山をかたどった墳土をきずかせ、さらに命じて、かれのために化州に碑を立てさせたという。太宗は、突厥を黄河以北に移し、右武侯大將軍化州都督懷化郡王の〔阿史那〕思摩を立てて乙弥泥孰候利苾可汗とし、李の姓を賜い、所領をひきいて、その本營を黄河の北に置かせることにしたという(『旧唐書』突厥伝、山田信夫1972)。

**薛延陀真珠毗伽可汗(夷男)** 貞觀4年(630)に唐が頡利可汗を平定したあと、夷男は東方の故郷へ帰り、宮廷を都尉撻山の北、独邏河の南岸の地に置いた。京師の北三千三百里のところにあり、東は室韋に、西は金山に、南は突厥にそれぞれ達し、北は瀚海(バイカル湖)に臨む地点で、すなわち古代の匈奴の故地である(『旧唐書』鉄勒伝、佐口透1972)。貞觀3年(629)、唐は突厥を討伐し、夷男を真珠毗伽可汗とした。その後反旗をひるがえし、貞觀5年(631)、李勣(徐懋功)の攻撃に降服した。貞觀19年(645)に夷男はにわかにかに他界したので、太宗はこれに対

し喪を發した。夷男の少子の肆葉護拔灼は兄の突利失可汗を襲い殺し、みずから即位した。これが頡利俱利薛沙多弥可汗である。灼は廻紇に殺され、かれの一族はほとんど全滅し、その残余の部衆5、6万人は西域に逃げこんだ。また〔鉄勒〕諸姓の俟斤たちはたがいに攻撃しあい、おのおのは〔唐に〕使者を派遣して帰順した。夷男の葬地はわからない。昭陵北司馬門には石像がたてられた。1982年に「薛延陀真珠毗伽可汗」の石像座が発見された。

**突厥答布可汗(阿史那杜爾)** 貞觀21年(647)に崑丘道行軍大總管となり、龜茲を征服、22年に西突厥の処密を破る。太宗が崩御したとき、殉葬を請うが、高宗は許可しなかった。永徽6年(655)卒し、輔国大將軍・并州都督に贈補される。昭陵に陪葬される。冢を葱山のように象り、碑を立てた(『旧唐書』列伝第59)。「突厥答布可汗右衛大將軍阿史那杜爾」銘の石像座が出土している。突厥族の阿史那什鉢苾と薛延陀真珠毘伽可汗の葬地は不明である。突厥の地に埋葬した可能性はある。

### 唐・新羅・百済の国際関係

真平王46年(624)いらい、善徳王、真徳王は「楽浪郡公新羅王」、文武王は「開府儀同三司新羅王」に封じられている。十四国蕃君長のなかで、新羅にたいしては王号と郡王号が複合的に授与された〔金子修一2001〕。真徳王3年(649)には唐の衣冠を着用する。同4年(650)に真骨の身分のものは「牙笏」を持つことが規定された。慶州龍江洞古墳の笏を持つ陶俑は唐から将来されたものである。唐の笏の制度をとりいれた。陶俑には胡人像もふくまれる。同時に出土した青銅十二支像もそのころ唐から伝わっている。文武王5年の伊浪文王の死去のさい、哀悼の意を表し、真骨の公服である紫衣と鈎帯が賜与された〔東潮2012〕。

- 真平王16年(594) 隋帝詔拜王為上開府楽浪郡公新羅王(『三国史記』卷4)
- 真平王46年(624) 唐高祖降使册王為柱国楽浪郡公新羅王(『三国史記』卷4)
- 善徳王4年(635) 唐遣使時節册命王為柱国楽浪郡公新羅王(『三国史記』卷5)
- 真徳王元年(647) 唐太宗遣使時節。追贈前王。為光祿大夫。仍册命王為柱国封楽浪郡王(『三国史記』卷5)
- 真徳王3年(649) 始服中朝衣冠(『三国史記』卷5)
- 真徳王4年(650) 下教以真骨在位者執牙笏(『三国史記』卷5)
- 真徳王8年(654) 王薨。諡曰真徳。葬沙梁部。唐高宗聞之。為举哀於永光門。使大常丞張文收持節弔祭之。贈開府儀同三司。賜綵段三百(『三国史記』卷5)
- 武烈王元年(654) 唐遣使持節。備礼册命。為開府儀同三司新羅王。王遣使入唐表謝(『三国史記』卷5)
- 武烈王7年(660) (蘇)定方以百済王及王族臣寮九十三人、百姓一万二千人。自泗泚乘船廻唐。…唐皇帝遣左衛中郎将王文度為熊津都督(『三国史記』卷5)。
- 顯慶5年(660) 分地熊津等五都督府(『旧唐書』卷4)。其大將禰植又将義慈來降、太子隆并輿諸城主皆同送款。百済悉平、分地為六州。俘義慈及隆、泰等獻于東都(『旧唐書』卷83列伝33蘇定方)。





十四国蕃君長の諸国



昭陵陵园北司馬紋門出土



突厥 薛延陀真珠毗伽可汗



于闐王伏闐信



吐蕃贊府



高昌王左武威詔將軍翹智勇

图 22 十四国蕃君長と昭陵北司馬門跡出土石像と碑石 [張建林 2006 榎原考古学研究所 2010]

- 義慈王 20 年 (660) 王及太子孝與諸城皆降。定方以王及王子泰、隆、演及大臣將士八十八人、百姓一万二千八百七人送京師。…析置熊津、馬韓、東明、金漣、德安五都督府。各統州郡。擢渠長為都督、刺史、郡令、以理之。命郎將劉仁願守都城。又以左衛郎將王文度為熊津都督。撫其余衆。定方以所俘見上。責而有之(『三国史記』卷 28)。
- 武烈王 8 年 (661) 以阿滄宗貞為都督(『三国史記』卷 5)。
- 文武王 2 年 (662) 唐使臣在館。至是册命王為開府儀同三司上柱国楽浪郡王新羅王(『三国史記』卷 6)
- 文武王 3 年 (663) 大唐以我國為鷄林大都督府。以王為鷄林州大都督。…唐皇帝詔仁軌檢校帶方州刺史、統前都督王文度之衆我兵(『三国史記』卷 6)
- 文武王 4 年 (664) 下教婦人亦服中朝衣裳。…百濟殘衆拋泗泚城叛。熊津都督諸軍事發兵破之(『三国史記』卷 6)。
- 文武王 5 年 (665) 伊滄文王卒。以王子礼葬之。唐皇帝遣使來弔。兼進贈紫衣一襲、腰帶一條、彩綾一百匹、綃二百匹。…王輿勅使劉仁願熊津都督扶餘隆。盟于熊津就利山(『三国史記』卷 6)。

660 年、百濟の義慈王とともに唐に帰順した禰氏一族の墓群が長安で発見された〔張全明・郭永 2012〕。禰素士 (M13) (708) は唐雲麾將軍左武衛將軍上柱国来運郡開国公、禰仁秀 (M23) (750) は禰素士の長子で虢州金門府折冲である。禰寔進 (M15) (672) は禰素士の父で唐左威衛大將軍来運郡開国子柱国である。禰寔進は禰植と同一人物である。いわば捕虜の身分で大將軍となっている。

唐は 660 年、滅亡した百濟の地に熊津都護府を置いた。十四国蕃君長など周辺諸国にたいする羈縻支配の時代である。また唐は 663 年に鷄林大都督府を置く。文武王は鷄林州大都督に任じられる。白村江戦争の勝利国の新羅に都督府が設置された。真平王代以来の羈縻政策から都督体制に支配方式がかわったのであった。

### 僕固乙突墓

モンゴル・トゥブ県のザーマル(Zaamar Sum)で発掘された。土洞墓で、墓誌、陶俑・木俑などの遺物が出土した〔羅新 2011、楊富学 2012〕。

墓誌によると、諡は乙突で、朔野金山人。祖は左武卫大將軍金微州都督の歌濫拔延で、父の思旬は金微州都督を引き継いだ。乙突は儀鳳 3 年 (678) 2 月 29 日に卒し、その年の戊寅 (678) に埋葬された。その葬地は西に峙葱山、北は蒲海に面するところである。乙突は乾陵石人像の題名に記されているという。

以儀鳳三年二月廿九日遘疾、終於部落、春秋卅有四。天子悼惜久之、敕朝散大夫、守都水使者天山郡開国公翹昭、監護吊祭、賻物三百段、錦袍金装帶弓箭胡祿鞍韉等各一具。凡厥喪葬、并令官給、并为立碑。即以其年歲次戊寅八月九日朔十八日壬寅、永窆于于纈礪原、礼也。生死長乘、榮華備、深沈苦霧、方結慘於松塋、颺颺悲風、獨含悽於薤鐸。对祁連而可像、寄口勒而有詞、述德表功、迺為銘曰、西峙葱山、北臨蒲海、土風是繫、英傑攸在。

### (僕固乙突墓誌)

僕固懷恩、鉄勒部落僕骨歌濫拔延之曾孫、語訛謂之僕固。貞觀二十年、鉄勒九姓大首領率其部落來降、分置瀚海、燕然、金微、幽陵等九都督府於夏州、別為蕃州以禦邊授濫拔延為右武衛大將軍、金微都督。拔延生乙李啜拔、乙李啜拔生懷恩、世襲都督(『旧唐書』卷 121 列伝第 71)。

僕固部世系が乙突墓誌をもとに復元された〔楊富学 2012〕。

一世歌濫拔延(647～?、右武衛大將軍金微州都督)―二世思匐(?～657、金微州都督)―三世乙突(635～678、右驍衛大將軍金微都督上柱国林中県開国公)―四世佚名(?～686、金微州都督)―五世設支(弟?、金微州都督)―六世曳勒歌(?～720 以前、充大武軍右軍討擊大使金微州都督)―七世勺磨(弟、?～741 以前、金微州都督)

懷恩(～765、右驍衛大將軍金微都督)は歌濫拔延(右武衛大將軍金微都督)の曾孫、乙李啜拔の子であった(『旧唐書』卷 121)。歌濫拔延を祖とする別の家系が知られた。

歌濫拔延・乙突・懷恩等の僕固部は代々金微州都督を受け継いできた。乙突墓の葬地によって、トゥブ県のザーマルの地域に金微州都督府が存在したといえる。オラーン・ヘレム墓はその南のオルホン・トール川流域に位置する。

貞觀 21 年(647)、太宗は六府七州を設置し。府に都督、州に刺史、府州の長史、司馬以下の官吏を置いた。僕骨を金微府とした(『旧唐書』卷 195 迴紇)。墓誌に乙突の祖歌濫拔延は「皇朝左武衛大將軍金微州都督」とみえる。子孫にあたる僕固懷恩は右驍衛大將軍金微都督として冊封の地で死亡、埋葬されている。金微は 650 年に設置された瀚海都護領の一都督である。

高宗は「金装帶弓箭胡祿鞍鞞」を賜与している。弓箭・胡祿は横刀とともに、儀衛の重要な佩器である〔苑淑英 2001〕。長樂公主、鄭仁泰・李勣墓・懿德太子墓壁画にみえる「虎鞞豹鞞」とよばれる虎や豹皮の弓袋のようなものであろう。葬具ならば、オラーン・ヘレム墓の金製鍔・鏢轡のような明器であったかもしれない。唐と突厥の間で豹皮が交易されていた。

### オラーン・ヘレム墓の被葬者の性格

墓室構造・壁画図像などの諸要素を比較すると、670 年前後の壁画墓と類似する。とくに阿史那忠墓(675)と諸々の点で比較すると、オラーン・ヘレム墓が先行して築造されたようである。

近在するザーマル僕固乙突墓(678)は唐の羈縻支配期(630—680)の最晩年、第二突厥帝国が形成される直前である。僕固乙突墓とオラーン・ヘレム墓は同一地域に存在する。二つの墓に築造上の時間差があり、オラーン・ヘレム墓が先行するようである。したがってオラーン・ヘレム墓は 660～70 年代に築造されたと推定される。

オラーン・ヘレム墓の墓室は全長 46m で斜坡墓道、各 4 の天井・過洞をそなえた大規模な墓である。新城長公主墓が約 50m、鄭仁泰墓が 53m、蘇定方墓が 73m、阿史那忠墓が 55m、安元寿は 60m、懿德太子墓は 101m、章懷太子墓が 71m で、オラーン・ヘレム墓は全長 50m 前後の大型墓に属するのである。

壁画題材は青龍・白虎、儀衛、列戟、門樓、牽馬、畏獸、蓮華、侍女で同時期の唐代壁画と共通する。列戟は阿史那忠墓が東西両壁 6 竿ずつの計 12 竿、蘇定方墓は計 10 竿であった。オ

ラーン・ヘレム墓は計6竿であるが、壁画に列載を表現しうる身分で大將軍級である。壁画には生前の身分関係が表象される。葬送儀礼は公的なものである。僕固乙突の喪葬にさいし、天子から葬具などが授けられた。

三梁冠や佩剣は李勣墓(司空公太子師贈太尉揚州大都督上柱国英国公)のものに相当する。

ビザンティン貨幣は高昌国の新疆吐魯番阿斯塔那墓群や唐長安城の西安何家村などで出土する。オラーン・ヘレム墓では長安から直接流入した冠帽や明器(馬具)があり、ビザンティンと唐の文物が伴出する。

身分と墓制との関係であるが、オラーン・ヘレム墓は右武衛大將軍(正三品)涼州都督の鄭仁泰(664)、左武衛大將軍の蘇定方(667)、右驍衛大將軍薛国王(從一品)の阿史那忠(675)、右驍衛大將軍金微都督上柱国林中県開国公の僕固乙突(678)、右威衛將軍贈代州刺史(從三品)上柱国の安元寿(683)の墓に匹敵する。

乙突は金山(金微山)人で、鉄勒の別部であった、突厥族であるが、都督として唐の墓制にのっとり、都護府の域内で埋葬された。蕃君長の右武衛大將軍阿史那思(李)思摩や右衛大將軍阿史那杜爾は昭陵に陪葬されている。

貞観20年(646)、瀚海・燕然・金微・幽陵・龜林・賀蘭・皋蘭・廬山・堅崑の九都督府が置かれた。その年の6月、英国公李勣は薛延陀を鬱督軍山で撃破し、五千余を斬首し、男女三万余人を捕虜としたとある(『旧唐書』巻3)。唐の突厥支配は軍事力を背景に、羈縻支配を断行している。

乙突墓はボルガン県とトゥブ県境を流れるオルホン川の東、支流のトーラ川の北に位置する。葬地は都督の地とはかぎらないが、金微都督府はオルホン川流域の東部地域に存在したといえる。現在の行政区域ではトゥブ県にあたる。

オラーン・ヘレム墓は乙突墓の南約30km、トーラ川の南に位置する。ボルガン県の東辺にあたる。『旧唐書』には「分置瀚海燕然金微幽陵等九都督府」と瀚海が最初に例示されている。安北都護府の中心地にもかかわる問題でもあるが、瀚海や燕然都督府がオラーン・ヘレムの地に位置した可能性がある。オラーン・ヘレム墓の被葬者は乙突墓とおなじ、都督級のものであるか、墓室規模は乙突墓より大きいため、より高位の人物も想定される。

オラーン・ヘレム墓は唐の羈縻支配期に築造された。被葬者は唐の羈縻政策によって將軍号が授けられた突厥族であろう。安北都護府下の都督であろうか。都の長安から帰葬した可能性もある。昭陵に陪葬された阿史那忠一族とかかわりのある人物であろうか。

オラーン・ヘレム墓の南2kmに契丹(遼)代のオラーン・ヘレム城、西20kmにチントルゴイ城、さらに西26kmにハルブフ城が位置する。遼は統和22年(1004)に辺防城して鎮州を設置したが、チントルゴイ城はその鎮州城に比定されている(臼杵・千田・前川2006)。

このオルホン・トーラ川流域は突厥第一可汗国期から唐羈縻支配期をへて東突厥第二可汗国期、ウイグル可汗国期、契丹(遼)の文化が栄えた地域である。オラーン・ヘレム壁画墓・僕固乙突墓の発掘は意義ぶかい。

(本稿は公益財団法人韓昌祐・哲文化財団2011年度研究助成による)

引用文献(発行年順)

- 夏竦 1957 「中国最近発現の波斯薩珊朝銀幣」(『考古学報』1957-2)
- 夏竦 1958 「青海西寧出土の波斯薩珊朝銀幣」(『考古学報』1958-1)
- 陝西省文物管理委员会 1956 「西安西郊唐墓清理記」(『考古通訊』1956-6)
- 賀梓城 1958 「唐墓壁画」(『文物』1958-8)
- 陝西省文物管理委员会管委 1959 「長安南里王村唐韋洞墓發掘記」(『文物』1959-8)
- 李遇春 1959 「新疆烏恰縣發現金条和大批波斯銀幣」(『考古』1959-9)
- 陝西省社会科学院考古研究所 1963 「陝西咸陽唐蘇君墓發掘」(『考古』1963-9)
- 陝西省文物管理委员会 1964 「唐永泰公主墓發掘簡報」(『文物』1964-1)
- 夏竦 1966 「新疆吐魯番最近出土の波斯薩珊朝銀幣」(『考古』1966-4)
- 夏竦 1966 「河北定興塔基舍利函中波斯薩珊朝銀幣」(『考古』1966-5)
- 護雅夫 1967 『古代トルコ民族史研究1』山川出版社
- 護雅夫 1971 「北アジア・古代遊牧国家の構造」(『岩波講座世界歴史6』岩波書店)
- 長広敏雄 1969 『六朝時代美術の研究』美術出版社
- 新疆維吾爾自治区博物館 1972 「吐魯番縣阿斯塔那—哈拉和卓古墓群清理簡報」(『文物』1972-1)
- 佐口透訳注 1972 「鉄勒伝」(『騎馬民族史2』平凡社)
- 山田信夫訳注 1972 「突厥伝」(『騎馬民族史2』平凡社)
- 陝西省博物館文管会 1972 「西安南郊何家村發現唐代窖藏文物」(『文物』1972-1)
- 陝西省博物館・礼泉県文物局唐墓發掘組 1972 「唐鄭仁泰發掘簡報」(『文物』1972-7)
- 岡崎敬 1973 『東西交渉の考古学』平凡社
- 陝西省博物館 1974 「唐李寿墓發掘簡報」(『文物』1974-9)
- 護雅夫 1976 『古代遊牧帝国』中央公論社
- 陝西省文物管理委员会 1977 「唐阿史那忠墓發掘簡報」(『考古』1977-2)
- 富平県文化館・陝西省博物館・陝西省文物管理委员会 1977 「唐李鳳墓發掘簡報」(『考古』1977-5)
- 陝西省文管会・昭陵文管所 1977 「唐臨川公主墓出土の墓誌和詔書」(『文物』1977-10)
- 中国社会科学院考古研究所 1980 『唐長安城郊隋唐墓』文物出版社
- 陳国英 1981 「西安東郊三座唐墓清理記」(『考古与文物』1981-1)
- 宿白 1982 「西安地区唐墓壁画的布局和内容」(『考古学報』1982-2)
- 王仁波・何修齡・单暉 1984 「陝西唐墓壁画之研究下」(『文博』1984-2)
- 磁県文化館 1984 「河北磁県東魏茹茹公主墓發掘簡報」(『文物』1984-4)
- 孫遲 1984 「昭陵十四国君長石像考」(『文博』1984-2)
- 崔漢林・阴志毅 1986 「耀県葭王山隋墓清理記」(『文博』1986-1)
- 昭陵博物館 1988 「唐昭陵長樂公主墓」(『文博』1988-3)
- 山西省考古研究所 1988 「太原市南郊唐代壁画墓清理簡報」(『文物』1988-12)
- 譚英杰・趙虹光 1990 「靺鞨故地上的探索」(『北方文物』1990-2)
- 西安市文物管理处 1991 「西安西郊熱電廠基建工地隋唐墓葬清理簡報」(『考古与文物』1991-4)
- 北京市文物研究所 1991 「北京豊台唐史思明墓」(『文物』1991-9)

- 張建林 1998 「唐墓壁畫中的屏風畫」(『遠望集』陝西人民美術出版社)
- 陝西省考古研究所 1998 『陝西新出土唐墓壁畫』重慶出版社
- 叔奎山 1998 「試析南方發現的唐代壁畫墓」(『北京大學百年國學文粹—考古卷』)
- 東潮 1999 「北朝・隋唐と高句麗壁畫」(『國立歷史民俗博物館研究報告』80)
- 昭陵博物館 2000 「唐昭陵李勣(徐懋功)墓整理簡報」(『考古與文物』2000-3)
- 孫機 2001 『中國古典服論叢』文物出版社
- 中國社會科學院考古研究所 2001 『偃師李園唐墓』科學出版社
- 陝西歷史博物館編 2001 『唐墓壁畫研究文集』三秦出版社
- 范淑英 2001 「唐墓壁畫〈儀衛圖〉的內容和等級」(『唐墓壁畫研究文集』三秦出版社)
- 申秦雁 2001 「唐代列戟制探析」(『唐墓壁畫研究文集』三秦出版社)
- 金子修一 2001 『隋唐の國際秩序と東アジア』名著刊行會
- 孫莉 2004 「薩珊銀幣在中國的分布及其功能」(『考古學報』2004-1)
- 陝西省考古研究所 2004 『唐新城長公主墓發掘報告』(『陝西省考古研究所田野考古報告』27、科學出版社)
- 陝西省考古研究所 2005 『唐李憲墓發掘報告』(『陝西省考古研究所田野考古報告』29、科學出版社)
- 李星明 2005 『唐代墓室壁畫研究』陝西人民美術出版社
- 白杵勲・千田嘉博・前川要 2006 「モンゴルトウラ川流域の契丹城郭」(『考古學研究』211)
- 昭陵博物館 2006 『昭陵唐墓壁畫』文物出版社
- 陝西省考古研究所・昭陵博物館 2006 「2002 年度唐昭陵北司馬門遺址發掘簡報」(『考古與文物』2006-6)
- 張建林・王小蒙 2006 「對唐昭陵北司馬門遺址考古新發現的幾點認識」(『考古與文物』2006-6)
- 陝西省考古研究院 2009 『壁土丹青陝西出土壁畫叢』科學出版社
- 奈良縣立橿原考古學研究所 2010 『大唐皇帝陵』(『奈良縣立橿原考古學研究所附屬博物館特別圖錄』73)
- 岡林孝作 2010 「十四國蕃君長の獻上—昭陵北司馬門遺跡」(『大唐皇帝陵』)
- 劉呆運・李明・尚愛紅 2011 「陝西咸陽底張十六國至唐代墓葬」(『2010 中國重要考古發現』文物出版社)
- 津野仁 2012 「古代轡の変遷とその意義」(『考古學雜誌』96-3)
- 東潮 2011 『高句麗壁畫と東アジア』學生社
- A. 오치르 2011 「몽골에서 발견된 고대유목민 벽화무덤에 대하여」동북앗역사재단 발표문
- 張全明・郭永 2012 「唐代百濟移民禰氏家族墓」(『中國重要發現 2011』文物出版社)
- 朴雅林 2012 「몽골에서 최근 발견된 돌궐시대 벽화고분의 소재」『高句麗渤海研究』43
- A. Очир・Д.Эрдэнэболд 2013 ”ЭРТНИЙ НҮҮДЭЛЧДИЙН БУНХАНТ БУЛШНЫ МАЛТЛАГА СУДАЛГАА” УЛААНБААТАР
- 劉呆運・李明・尚愛紅 2011 「陝西咸陽底張十六國至唐代墓葬」(『2010 中國重要考古發現』文物出版社)
- 羅新 2011 「蒙古國出土的唐代僕固乙突墓誌」(『中原與域外慶祝張廣達教授八十壽研討會論文集』國立政治大學歷史學系)
- 楊富學 2012 「唐代僕固部世系考—以蒙古國新出僕固氏墓誌銘為中心」(『西域研究』2012-1)
- 楊富學 2012 「唐代回鶻僕固部世系考—以蒙古國新出僕固氏墓誌銘為中心」(『高台魏晉墓與河西歷史文化研究』甘肅教育出版社)
- 東潮 2012 「新羅金京の坊里制再論」(『百濟와 周邊世界』진인진, 서울)



青龍・白虎・門楼

墓道



墓道

列戟・儀衛

墓道

図版1 オラン・ヘレム墓



白虎

墓道西壁



青龍

墓道東壁

図版2 オラン・ヘレム墓





列戟・儀衛

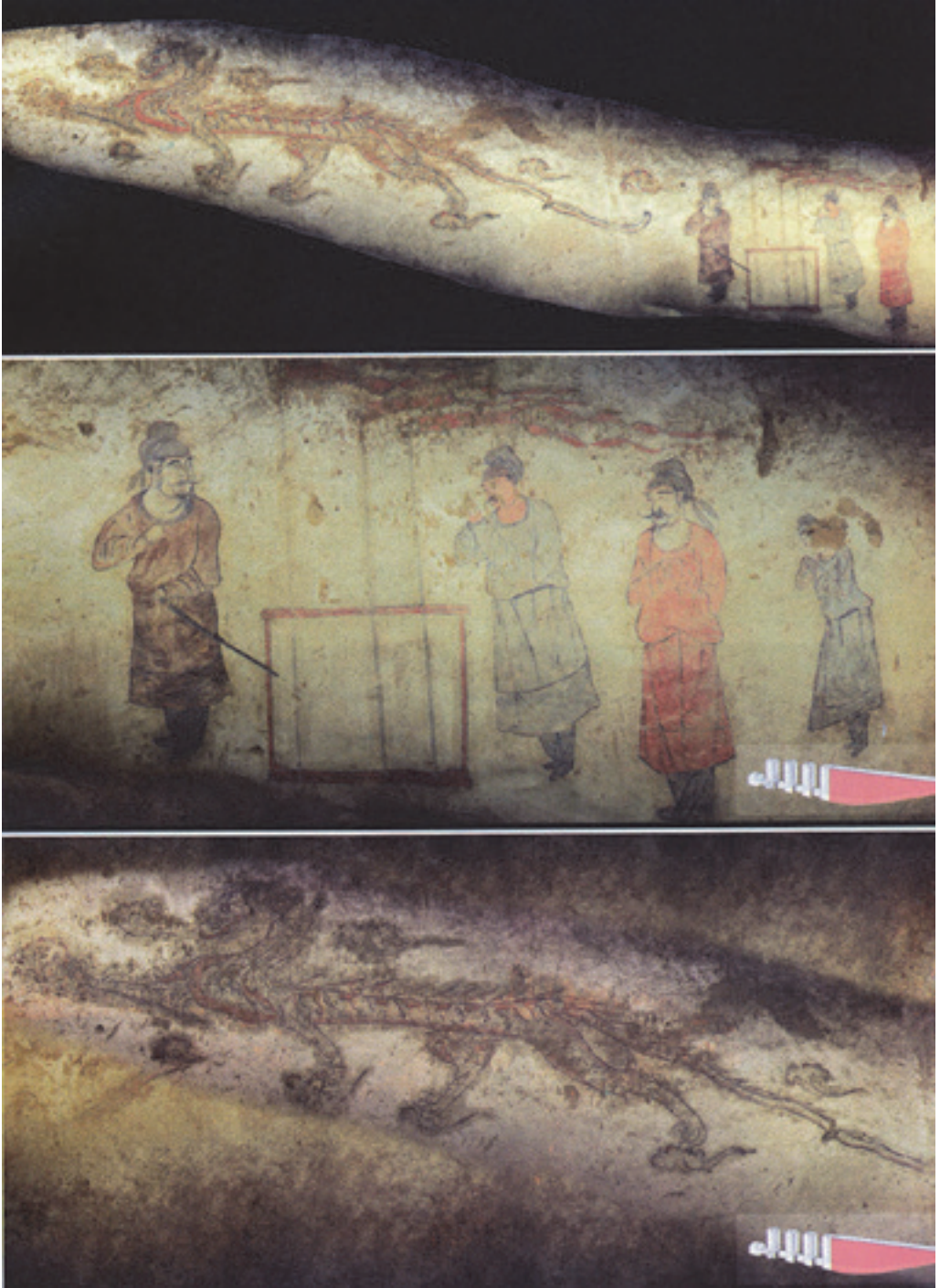
墓道西壁



列戟・儀衛

墓道東壁

図版3 オラン・ヘルム墓



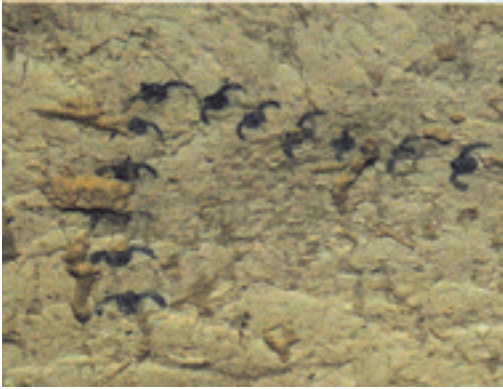
墓道西壁 白虎・列戟・儀衛・男侍

図版4 オラーン・ヘレム墓

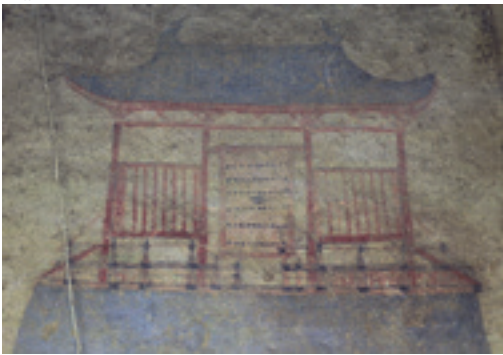


墓道東壁 青龍・列戟儀衛・儀衛・男侍

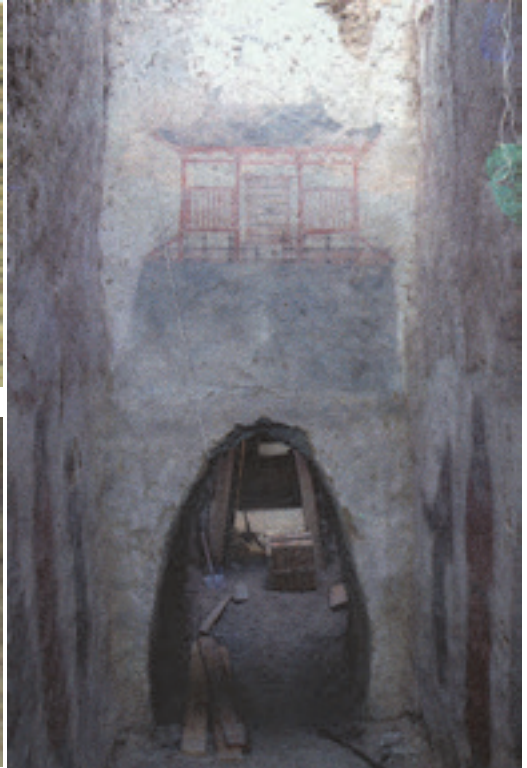
図版5 オラーン・ヘレム墓



雁



門楼



墓道



蓮華紋

第1過洞北壁

図版6 オラーン・ヘレム墓



牽馬

第1 過洞西壁



牽馬

第1 過洞東壁

図版7 オラン・ヘレム墓



男侍



第2過洞東壁



男侍

第2過洞西壁

図版8 オラン・ヘレム墓



第4過洞



第4過洞龕室

図版9 オラーン・ヘレム墓



北壁

東壁



墓室

図版 10 オラーン・ヘレム墓





北壁

東壁



図版 11 オラン・ヘレム墓

墓室



図版 12 オラーン・ヘレム墓出土の冠・貨幣・馬具